第１５６号

芥川だより

発行日＊２０２０年１月１日　e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集・発行人
下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

老いへのあがき

冬場、小屋の土間に藁のむしろを敷き傍らにたんツボと小さな黒い素焼きの火鉢。水を入れた茶碗に幾度となく手をつけわら縄を編む。やせ衰えた身体はしわだらけであった。早く死にたいと言いながら、独り藁を編む。老いた祖父の姿は私には、なんともやるせない情景に見えた。しかし、当時の田舎ではよく見られた爺さんたちの居場所だったのだろう。堀炬燵に入り暖かくしているような環境ではなかった。雪で野良仕事も出来ず、母屋での居場所もなく、離れの小屋が唯一爺さんの居場所だった。誰が来るわけでもなく、日がな一日むしろに座り続けるのである。楽しみといえば、刻み煙草をキセルに詰め込み一服する時だけだ。毎日、変わることが無い時を過ごさねばならない、身体も老いて手足が思うように動かなくなり、しまいには立てなくなる。老人には病院は遠い遠い存在で臨終になって医者が呼ばれる時代であった。

私は、婆ちゃんの介護をしながら人生の奥深さを考える。昔と違い今は、老人たちは恵まれているが、はたして幸せなのか。婆ちゃんの一日は、寝ている時以外は、誰かに世話してもらわないと生きていけない。自由が無いのである。認知症と脳梗塞でわが身を他人にゆだねて日々を過ごすしかない。介護認定の人が来られて私に「よく介護が出来ますね？この状態だと普通は介護施設か病院で寝たきりですよ」と言われる。確かにベッドから車いす、車いすから便座への移動は力がいる。デイサービスを利用しながらの在宅介護でも体力がないと出来ない。

古い記憶と今ある現実を見ながら、私は強く思うのである。長生きしたいわけではないが、生きている間は元気でいたい。自分で立ち歩ける身体で最後の時を迎えたいと。その為に無謀とも思えるような運動を続けている。怠惰に流されそうになっても、心にムチを打ち堤防をジョギングし六甲山を登る。果てしない己との戦いを今年も続けたい。婆ちゃんを介護し続けるためにも。

死をめぐるあれやこれ（６２）

石川　吾郎

ケン・ローチ「家族を想うとき」を見る。

英国の社会は、よく日本の社会の数年先を走っていると言われている。英国と言えば福祉国家という印象をもつが、現在の英国はその面影はないらしい。八十年代のサッチャー政権以来、徹底して新自由主義的な政策が行われて、労働者の権利や福祉が切り捨てられ、国民の間の格差拡大、貧困問題が深刻になっているからだ。◆この映画は、仕事に失敗した主人公が宅配便の配達の職に就こうとするところから始まる。だが就職ではなくフランチャイズという個人事業者としての契約。仕事に使う車は自分で購入するか、バカ高いリースを使う他にない。介護職の妻が使う車を売ってローンで大型のバンを購入。いざ仕事を始めるが様々な困難が待ち受ける。息子が非行で呼び出され仕事を休むと罰金、出来高払いで稼ぎを良くしようと頑張ると一日十数時間の労働になってしまう。疲労困憊、睡眠不足で事故を起こしても穴を開けられない、家族の制止を振りきって仕事に出ようとする。幸せだった家庭も身体も崩壊していく・・・◆日本でもコンビニ店主の例が話題になったが、この個人契約の制度が今後も増加するだろう。使う側にはこれほどうま味のある契約はないからだ。保険を付ける必要もないし事故で責任を取る必要がない。街でよく見る配達のウーバーイーツも、事故も自己責任で何の補償もない労働だ。貧困ビジネスといえる。（裏に続く）

◆こんなふうに、労働者の権利が次々に奪われて、儲けるのは会社だけという社会に、この国は足を踏み入れてしまっているのだ。英国では、大多数の国民を貧困に陥れる新自由主義的な社会を変えようという運動が強く盛り上がってきている。日本にもぜひ、そのうねりを起こしていきたいものだ。

芥川だより一五六号　目次　ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
みんな知ろう日本の危機	伊藤　明	2
素老人☆よもだ帳70	坂本一光	6
哲学爺いの時事放談20	祖蔵哲	10
大峰奥駆道28	下村嘉明	13
大人の今昔物語63	石川吾郎	14
B級サラリーマン渡世譚78	明石幸次郎	16
オクラの山たより40	因了生	17
隠された歴史15	満田正賢	21
道をゆく9　伊勢本街道（三）	成瀬和之	24
孫ウオッチング	福田　圭	24
編集後記	嘉	25
ふみの道草　18	山椒魚	26
俳句	土田裕	26
	影山武司	26

みんなで知ろう日本の危機

伊藤　明

安倍政権の正体・見取り図

はじめに

安倍氏本人も含め、安倍政権の不正・不祥事が次々に明るみに出て、それがあまりに多いので、国民もあきれ果てて感覚マヒに陥ってしまっている感があります。マスコミも一時は騒いでも一過性に終わり、責任を取らせることができないままになってしまっている。これではいけない。そこで今回試みに「安倍政権の正体・見取り図」として、一目瞭然な図を作成、簡単な説明をつけて、すぐに思い出せるようにしてみました。はなはだ不十分なものですが読者の皆さんの参考にしていただければ幸いです。まず次のページの図を見てください。領域Aは安倍政権を操り動かしている勢力、領域Bは安倍政権が行っていることを図示しました。以下の本文には、各項目のごく簡単な解説を試みていますので、興味をもたれたものから順不同で読んで頂くとよいと思います。

＊＊＊＊＊

領域A　この部分は、安倍政権を支配し動かす勢力を表している。

米国ウォール街　米国ウォール街・グローバル企業の多くは、世界の中で最も収益になる日本を狙っているという。それは農業・畜産・武器・ゼネコン・医薬品・医療保険・カジノ・情報産業など、多分野に渡っている。特に従来は、日本国内での法的規制で進出を阻まれていた分野について圧力をかけ、規制の緩和や撤廃を勝ち取り、本格的に侵出を目論んでいる。いずれの分野も近々本格的に侵出をしてくる。これこそが安倍政権の「日本を世界一自由にビジネスができる」環境とすることの内容なのだと言える。

経団連など　大企業の団体である経団連は、国民の生活を顧みず、自分たちの短期的な利益獲得ばかりをもくろみ、政権を操っている。典型的なものが消費増税の提言。深刻なデフレになることは明かであるにもかかわらず、提言を続ける裏には、法人税減税に加え、「輸出戻し税」という莫大な還付金が増えることになるからである。

新自由主義　緊縮、規制緩和・撤廃、自由貿易のセットからなっている。自己責任論に基づいて、小さな政府を目指す。福祉や医療などの国民の生命を守る分野からも予算を容赦なくけずる。◆プライマリバランス黒字化目標を掲げ、その年の税収以上には政府支出をしない、という基本方針。これにより、福祉予算には常に「財源の問題がある」と、切り捨ての口実に使われる。一方で武器の爆買いについては、ふんだんに予算を付ける。

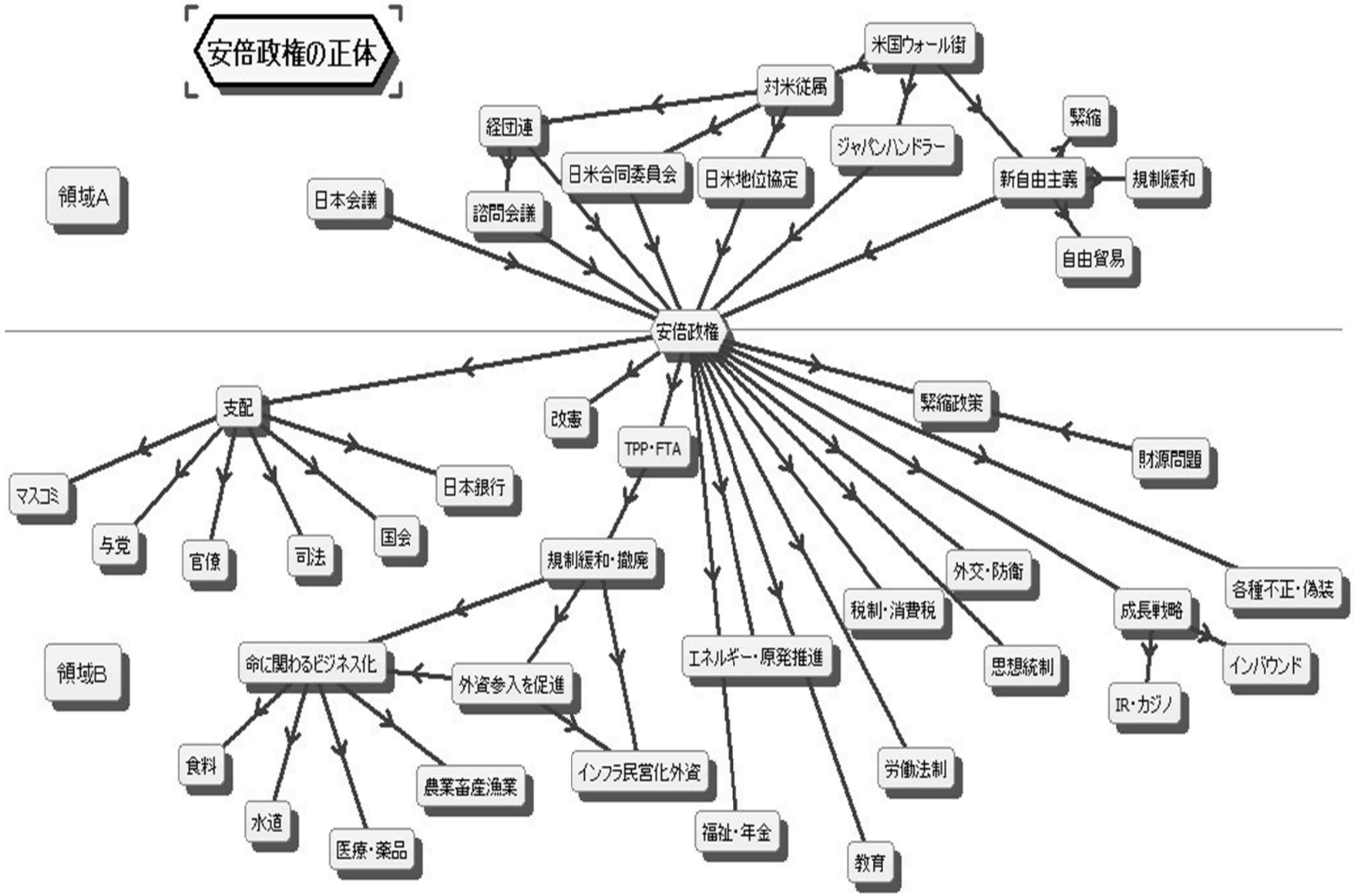
◆英国サッチャー政権以来、英国では新自由主義的な政策が実行されて、かつて福祉社会であった英国社会はいまや自己責任の社会になっている。社会派監督の大家ケン・ローチが「家族を想うとき」でみごとに英国社会の深刻な状態を、疲弊した労働者とその家庭の崩壊の悲劇を描いている。英国は日本の社会の数年の未来を走っているとされ、日本社会の今後を見ているようだ。

新自由主義は、緊縮・規制緩和・自由貿易の三点セットからなっている。

対米従属　対米従属の構造については、矢部宏治著「知ってはいけない」（講談社現代新書）1、2をぜひ参照していただきたい。

日米地位協定　米軍は、日本の何処にでも基地を作ることができることになっている。国境を超えて、米軍が自由に軍事活動できる。実際に、関東の上空は広大な「横田空域」が設定されており、この領域の主権・管理は米軍が行っている。民間機もここには入ることができないので、羽田空港の離発着は大回りを余儀なくされる。また横田基地などには米軍関係者はフリーパスで入ることができて、そのまま日本国内に入っている。オバマ・トランプの訪日したのは実際に米軍基地であった。異常な協定であり、日本は完全な独立国とは言えない状態が続いている。

日米合同委員会　極秘裡に定期的に行われおり、その内容は公開されない。出席するのは、米軍幹部と日本の幹部官僚。


安倍政権の正体
米国ウォール街
対米従属
経団連
緊縮
ジャパンハンドラー
日米合同委員会
日米地位協定
新自由主義
規制緩和
領域A
日本会議
諮問会議
自由貿易
安倍政権
支配
改憲
緊縮政策
TPP・FTA
財源問題
マスコミ
日本銀行
与党
官僚
司法
国会
規制緩和・撤廃
外交・防衛
各種不正・偽装
税制・消費税
成長戦略
領域B
命に関わるビジネス化
外資参入を促進
エネルギー・原発推進
思想統制
インバウンド
IR・カジノ
食料
農業畜産漁業
インフラ民営化外資
労働法制
水道
福祉・年金
医療・薬品
教育

席するのは、米軍幹部と日本の幹部官僚。ここで各種の米国（米軍）との密約が行われる。日米の最高権力者にも知らされないものもあるという。ここでの取り決めは憲法よりも上位にきて、米国から日本への指令も行われるという。

ジャパンハンドラー　つまり日本政府に指令を出して操っている存在は、すでに明らかになっている。有名なものが「アーミテージ・ナイとレポート」。数次にわたるこのレポートの方針は、歴代の内閣によってほとんど実行されてきていることが証明されている。例えば集団的自衛権の行使容認についても、このレポートの中で強く要請されていた。そもそも、ジャパンハンドラーと見解を同じくしていた安倍氏を総理につける策動があったと考えられる。

諮問会議　各種諮問会議（中心は経済財政諮問会議）で、「民間議員」と呼ばれる経団連やグローバル企業の利益代表が入り込み、自分たちの儲けになる政策を提言して政府に実行をさせる。主要な諮問委員会の責任者は首相自身がなっている。ＮＨＫはこのような提言を権威づける報道をニュースで流して、国民を騙すのに加担する。非正規労働の制度の創生を主導した竹中平蔵は、諮問委員会の「民間議員」であり、同時に人材派遣パソナの会長。自社の儲けのために政策の立案をしている。その後のパソナは派遣会社として多大な収益を上げている。このような利益誘導は許されない。

日本会議　日本会議は、日本を戦前の明治憲法下の天皇中心の国家に逆戻りさせるのを目指す極右カルト団体。安倍内閣の大臣は大多数がこの構成員をなしている。改憲によって、独裁政権をめざすのはこの団体の影響が大きいと考えられる。菅野完「日本会議の研究」扶桑社、青木理「日本会議の正体」平凡社など。

＊＊＊＊＊

領域Ｂ　支配

マスコミ　主要な大新聞・メディアのトップや、有力解説者などが、安倍首相との会食を定期的にしている。政権に対する批判を流さないように圧力をかけられて、マスコミ自身が忖度をするようになっている。ＮＨＫ会長人事も、実質的に政権が握っている。大新聞は、消費増税にあたって軽減税率の適用を求めていた。それと引きかえに政権批判を控える、消費増税に対する反対報道を出さない。

与党　自民党の党内で、人事と資金が官邸に集中するようになっている。従来の派閥が機能しなくなっている。その結果、対立派閥による首相おろしなどのコントロールが効かなくなっている。独裁的な体制になっている。この背景には小選挙区制度の深刻な問題がある。

司法　最高裁長官は、内閣総理大臣の任命。政権に不利な判決は少なくなっている。裁判官の管理強化によって、統制。検察の人事をコントロールして、政権の不正に対する検察の動きを封じる傾向。瀬木比呂志「絶望の裁判所」講談社など。

国会　国会運営は野党の要求を無視する傾向が強い。予算委員会の開催を逃げる。無意味な与党議員の質問時間を増やし、野党議員の質問時間の割合をけずる。

官僚　内閣人事局が幹部官僚の人事を一手に掌握するようになって（二千十四年）以来、官僚たちは出世を握られた首相官邸に対して忖度し、安倍氏のウソに合わせる国会答弁などの見え透いた嘘をつき政治の倫理的崩壊の原因をなしている。

日本銀行　安倍氏に近い黒田総裁になって以降、株価の維持のために、大企業の株の取得に、大量の資金を投入。景気実態と株価の乖離。日銀が独立性を放棄して、政府の下請け化している。

改憲　安倍政権は改憲を目指しており、九条の改定を主張している。しかしそれだけでなく、**緊急事態条項**を憲法に書き込もうとしている。これはかつてドイツの民主的なワイマール憲法下でナチスが独裁政権を確立した手法であり、災害や戦争などで政府が緊急事態を宣言すれば国会を停止し、法律と同等の効力をもつ政令を発し、予算執行も自由にでき、人権も制限できるというもので、これを許せば独裁政権が完成することになってしまう。改憲については、ぜひとも阻止する必要がある。

緊縮政策

規制緩和・撤廃　外資参入を促進。安倍首相の言う「世界で最もビジネスしやすい国を目指す」の内実は、日本の富を外国企業に流すことのできる国、ということになる。農業、観光など各産業で、外資導入を謀っている。各種インフラ公共事業入札にも外資の参入を規制せず、日本の建設業を衰退させる。水道事業も仏ヴェオリア社が最も有力。

財源問題　緊縮財政の裏には、常に財源がない、ということを口実にする。特に福祉予算には意図的に財源問題を政府は叫ぶ。消費増税はその口実によって行われたが、実態は福祉予算に回るのは、僅かしかない。米国製の戦闘機や米国を守るための高額なイージスアショアの購入を中止すれば、十分に財源まかなえるし、計画的な財政出動により、財源確保も十分に可能である。緊縮政策は、デフレを引き起こし国民の貧困化を進行させてしまう。

命に関わるビジネス化

食料　堤未果「日本が売られる」幻冬舎新書が参考になる。「売り渡される食の安全」角川新書が参考になる。

◆ＴＰＰ、日米貿易協定などにより、日

本の農業・畜産業が壊滅的打撃を受けることになる。食料自給率がさらに低下し、三十％代から十％代へ。国家としての食料安全保障を放棄する政策であり、利益を外資に流す政策。◆種子法の廃止により、外国巨大資本に作物の種子の独占を許すことになる。信じられないことに、自家収穫の種子を撒くことも禁止されることになる。また遺伝子組み換え作物の輸入に、制限が撤廃されてしまう。「遺伝子組み換えでない」表示が事実上撤廃されることが決定されている。輸入を容易にするように農薬・除草剤（グリホサート）など使用薬剤の基準値を、世界の潮流とは逆に何十倍にも緩和してしまった。◆食の安全とは逆行する政策。米国産牛肉には肥育のためにエストロゲンが投与されているが、その濃度が国産に比較して六百倍に上る。とくに牛脂が高濃度となる。これは乳癌などのリスクを高めることが知られている。牛脂はカレーやシチューのルーやハンバーグに混入されていることが多いので要注意。

水道　水道民営化は世界の二百五十以上の地域で失敗に終わっている。水道料金が跳ね上がり、水質が低下、料金が払えないとすぐに給水停止される。世界は再公営化の流れにある。これにあたって長期契約による莫大な違約金が壁になっている。コンセッション方式（営業権を民間に委ねる）、老朽化したインフラの修理は自治体に残し、利益をだす経営のみを民営化するという話し。しかも外国資本へ。日本では仏ヴェオリア社がすでに複数の自治体に入り込み、業務の一部を担っている。ヴェオリア社には麻生太郎の娘婿が。

医療・薬品　国民皆保険の制度をなし崩しに崩壊させつつある。つまり、医療費の自己負担の増額。高齢者の自己負担額を二倍に引き上げ。公的保険での医療行為を制限する。医療報酬の切り下げで、医療機関の経営を危機的状況に陥れる。◆自由診療を導入して自己責任論で私的な保険に加入を推進する。これらの保険は主に米国の保険会社であり、国民の健康と命を米国保険会社に差し出すことを意味している。公的医療保険の弱体化は、健康弱者・高齢者の切れ捨てを意味している。◆新規医薬品の法外高価な薬価を認める。これはすなわち公的保険の崩壊へ導くことを意味している。

農業・畜産・漁業　ＴＰＰ・日米ＦＴＡにより、食料自給率が三十数％から、十数％まで低下するとの試算がある。これらの条約は、日本の農業・畜産に壊滅的な影響を与える。◆米国産牛肉には肥育ホルモンが使用されている。これはホルモン関連の乳ガンとの関連が指摘されている。女性の乳ガン罹患は、五十年前は五十人に一人だが、現在は十四人に一人と急増している）。国産牛と比較して、エストロゲンがアメリカ産牛肉は六百倍も高かった。特に牛脂で高濃度。◆種子法の廃止で、遺伝子組み換え作物などを売り込む外資大企業の進出を許す。「遺伝子組み換えでない」表示を厳格化・事実上の禁止を、二三年から実施することがすでに決定されている。彼らは種子の独占的販売を目論み、自家栽培の種子を使うことを禁止する。◆漁業権を民間企業に売却することが可能になった。これらは水道民営化とともに宮城県が知事の権限で推進をしている。

エネルギー・原発推進　フクシマ原発事故の収拾は全くつかないまま、原発を推進する安倍政権。核燃料保存も放射性汚染物処理もメドがたっていない。まさにトイレのないマンション状態。さらに汚染土を公園などの土壌として全国にばらまこうとしている。また原発推進の裏にはどす黒い利権構造が潜んでいる。自然エネルギー転換への技術開発には消極的で遅れをとってしまっている。

税制・消費税　消費増税にはかならず同時に法人減税が行われている。その規模もほぼ同じ。つまり消費税は法人減税の補填にあてられていることになる。その他にも大企業には数々の優遇措置がある。かつてトヨタが数年間、合法的に納税していなかったことは有名。また「輸出戻し税」は、輸出企業に消費税分の還付がされるもの。これによりトヨタ本社のある豊田市などの税務署は毎年膨大な赤字となる。経団連などが、モノがうれなくなる消費増税を主張するのはこのため。・大新聞には軽減税率が適用され、これと引き替えに大新聞は消費減税を主張していない。国際通貨基金が二十％への消費税率引き上げを盛り込んだ提言（これは財務省職員が出向してヤラセ）。

福祉・年金　福祉政策には、必ず財源問題が言われる。消費税を福祉の財源にするといわれて導入されたが、現実には法人税減税に費やされてしまって、福祉の財源にはまわっていない。生活保護費の減額など、国民の最後のよりどころを破壊する。国民の虎の子の年金資金を株式投資に投入し、膨大な損失を出し続けている。年金制度の破綻を規定事実と国民を洗脳し、年金支給の年齢を上げる。老後二千万円を用意することが必要だと、政府が発表をする。

外交・防衛　北方領土問題では二島返還すら暗礁に乗り上げ、拉致問題も進展はない。米国には不平等貿易条約を結ばされる。国内にはウィンウィンと言い訳。イージスアショア、戦闘機などの兵器爆買。防衛予算は毎年増額。イランナンバー2司令官殺害というトランプの国家テロにより戦争の危機が増大しているところに、自衛隊派遣を閣議決定をして、日本を戦争に巻き込まれる危機に陥れている。

沖縄問題　捨て石として利用。沖縄住民については考えず犠牲にし続ける。カネ

によって分断する手法。
泥沼の辺野古の埋め立て強行、環境破壊と同時に、技術的困難が明かになっても税金を投入。辺野古ができたとしても、普天間が返還される補償はない。

教育　緊縮を名目にして、政権は教育関連の予算も次々に削っている。科研費・私学助成金など。日本の科学研究と教育のレベル低下は歴然としている。大学の学費の推移を考えると七十年代には公立大学は年間一万二千円から三万六千円だったものが現在は数十万円。奨学金という名の高利貸し。偏向した歴史・道徳教育。入学試験採点業務の民間委託。利権化。

各種不正・偽装　モリカケ問題、「桜を見る会」疑惑、政治の私物化、オトモダチ優遇。公文書破棄・改竄・隠蔽は、特に安倍政権で著しい。自衛隊派遣の記録からモリカケ「桜」などの公文書の不正はもはや民主国家の名に値しないほど。◆景気拡大を偽装するため日銀と年金資金を総動員して株価をつり上げる。◆統計不正。GDP統計の取り方を変更して、景気が良いように見せかける。◆原発被害についての基本的な統計を故意に取らない。小児甲状腺ガン統計など。

成長戦略　緊縮を名目に、まともな産業振興策を行わない。従ってまともな成長戦略はないに等しい。

IR・カジノ　「カジノで景気を語る政治家はまるで権力を握った“詐欺師”だ」小林節氏の言葉は的を射ている。競馬やパチンコなど従来の賭とは、桁違い。必ず胴元が儲ける。スロットマシーンは一台で一日五百万の儲けがノルマなのだと。不正の温床。国民の金を外資に流す装置。残るのは荒廃と依存症による生活破壊。

インバウンド　外国人観光客が日本に来るのは、物価の安くなった割安感による。海外資本の豪華ホテルを誘致して、従業員は現地人たる日本人。典型的な発展途上国的な図式。

TPP・FTA　非正規労働がこれほど蔓延して、当たり前だった労働者の権利が奪い取られていった。さらに残業代をゼロにされ、保証もない状態におかれる。◆日米貿易協定は、本年元日から一部発効してしまったが、今後さらに多くの分野で行われる。TPPですでに日本は多くを相手国に譲ってしまったが、日米貿易協定でさらに多くをむしり取られる。その内容については国民にひた隠しにしている。メディアも正確な内容を報道していない。

思想統制　愛知トリエンナーレ「表現の不自由展」の事件に見るように、文化に対して財政補助を口実に文化事業に対して干渉をしてくる。総務大臣の「電波停止」発言のようなマスコミに対する露骨な圧力。また安倍氏とマスコミ各社のトップ・主要政治解説者などと度重なる会食。街頭演説でヤジを飛ばしただけでも排除される、など。報道の自由度が昨年で世界六七位。

労働法制　無保障・自己責任論の非正規労働の拡大。パソナの会長竹中平蔵が主導し、人材派遣のパソナが大儲けする構造を作る。一九八六年に制定された労働者派遣業法。十年後の九六年には対象業務を二六業務に拡大し九九年には自由化した。二千四年には製造業にまで拡大した結果、低賃金の派遣労働者が爆発的に増え将来の見通しも立たず結婚もできず少子化が進んだ。
・フランチャイズ制は個人事業者との契約で、会社は保険も保障も免れ、個人は無保証状態。残業代ゼロ制度の拡大。低賃金の固定化。外国人労働者でさらに底辺への競争。

外国人労働者　低賃金で働く労働力。労働力不足を口実に、日本人と低賃金競争をさせることになる「底辺への競争」。外国人労働者の人権無視。

まとめ　ここまで見てはっきりするのは、安倍政権のしていることがあらゆる方面で国民の生活を破壊して、安倍氏を支持する日本の大企業と、安倍氏に近しい者たち、そしてなにより米国のグローバル企業の利益に奉仕をしているということです。日本という国を、あらゆる側面から破壊しています。どの分野を見ても、戦後これまで営々として築き上げてきた国民の生活と生命を守る制度ないしインフラを破壊し、外資の利益のために差し出すという政策がとられているのです。この視点から見れば、安倍政権の政策の方向性はすべての分野できれいに説明できるでしょう。安倍政権が誰のための政権であるのか、これだけ見れば明らかなのです。安倍政権の視野には、国民の生活や生命を守るという視点は明らかに欠如しており、国民の実質賃金を最も減らし、実質消費を最も減らし、出生数を最も減らすという、戦後政府で最悪の政府といえます。さらに安倍政権を動かす力と言えば、次のようになると思われます。
第一に、米国を中心とするグローバル企業の利益に奉仕する、そのために国民を守る制度を破壊し、規制緩和で、企業の利益をふくらます。
第二に、日本会議の極右の思想に沿って、戦前の天皇中心で国民の人権を抑圧する独裁政権を復活させようとする。そのために改憲に躍起になる。
第三に、国内の大企業に奉仕し、権力者に取り入る者たちのみを優遇し、そのためには公文書不正・違法献金などの不正を止めどなく拡大する。
　今回の記事は、一つの見取り図を作る、あくまで一つの試みです。取り上げた一つ一つの項目については、非常に不十分

なものですので、気になる点ないし興味を持たれた問題については、読者の皆さんがご自分で調べてみることを強くお勧めします。ここに取り上げた関連語でネット検索されるのもよし、関連の本を図書館などで当たってみられるのもよいと思います。これらの問題の中には、残念ながら日本のマスコミが取り上げることがなかったり、政府の見解をそのままに伝えるだけのもので、国民から隠されている問題もあります。もはや日本のマスコミの流す情報は、眉に唾して吟味する必要があるものになっています。マスコミのトップが権力者と会食を重ねている状況が変わらなければ、これは変わる見込みはないといえるでしょう。

素老人☆よもだ帳（７０）

坂本一光

◆「どこでもでんきー」――リチウムイオン電池のノーベル化学賞受賞に寄せて

はじめに

人類が電池という電気を取りだすしくみを見つけておよそ二二〇年、二〇一九年のノーベル化学賞は、「リチウムイオン電池の開発」の業績により吉野彰・旭化成名誉フェロー3氏に授与されることとなった。共同受賞者は、いずれも米国のスタンリー・ウィッティンガム氏とジョン・グッドイナフ氏である。

リチウムイオン電池は、小型・軽量・高電圧で寿命が長く、繰り返し充電可能な二次電池である。ニッケル-カドミウム電池のようなメモリー効果もなく、電池を使い切る前に充放電を繰り返しても起電力が低下せず、短時間しか使えなくなってしまう心配もない。携帯・スマホ、カメラ・ビデオカメラ、ノートパソコンから電気自動車に至るまで広範囲に普及し、私たちの暮らしを支えている。リチウムイオン電池は、電気自動車のさらなる普及や太陽光・風力発電などで得た自然エネルギーの蓄電システムへの応用などにより、環境問題にも大きく貢献することが期待される。

私たちは毎日、ドラえもんが「どこでもでんきー」と言って魔法のポケットから取り出してくれたような電池の恩恵にあずかっている。リチウムイオン電池のノーベル化学賞受賞というこの機会に、電池の世界をのぞいてみよう。

1　電池の発見とそのしくみ

（1）ガルバーニとボルタ

ことの始まりは、十八世紀末、イタリアの解剖学者ガルバーニによる「動物電気」の発見だった。彼は、蛙の脊椎に銅製のフックを挿入し鉄製の枠に吊るしたとき、蛙の足が鉄枠に触れると足の筋肉がけいれんすることに気づいた。すでに静電気が筋肉の収縮を引き起こすことは知られていて、2種類の金属の間に筋肉があり金属どうしが接触して電気が流れたことがわかった。ガルバーニは蛙の足に電気があると考えたが、彼と同じイタリアの物理学者ボルタは二種類の金属の接触に電気の発生の原因を求め、一八〇〇年、ボルタ電池を発明した。異なる二種類の金属を電極にしてその間に、動物ではなく食塩水のような電気を通す溶液（正電荷を持つイオンと負電荷を持つイオンからなる電解質溶液）を置くと、電極から継続して電気を取り出せることを示した。ボルタ電池は、一瞬で放電する静電気に対して「動電気」とでも言うべきものを生むしくみであった。

（2）電池のしくみ

ボルタ電池のように自然に、自発的に起きる化学反応を利用して、物質がもつ化学エネルギーを電気エネルギーに変えるしくみを、化学電池という。化学電池に利用できる化学反応は、物質の酸化還元反応である。電池と電気で動く機器で電気回路をつくり回路を閉じると、電池の負極では物質が酸化される反応（電子を放出する反応）が起きる。負極からは、それに伴って物質が放出した負電荷を持つ電子が電池の外に流れ出す。一方、正極には負極からの電子が流れ込み、それによって物質が還元される反応（電子を取り込む反応）が起きる。酸化される物質、還元される物質は、電極自体であってもよいし電池内部の電解質成分であってもよい。こうして一つの化学反応（電池反応）が完結し、電気が取りだされる。

ボルタ電池やその後実用化された各種乾電池、酸化銀電池、水銀電池などは、放電反応が終わってしまえば充電・再使用のできない一次電池である。それに対して、鉛電池やニッケル-カドミウム電池、ニッケル-水素電池、今回受賞のリチウムイオン電池などは充電可能な二次電池である。以後、必要に応じて電池を一次、二次と区別する。なお、太陽電池は太陽の光エネルギーを電気エネルギーに変える物理電池である。

（3）電気化学の夜明け

ガルバーニやボルタの研究は、当時ナポレオンによるイタリア遠征の余波もあってかヨーロッパに広く知られ、科学界に大きな影響を与えた。驚くべきことに、ボルタ電池の発明と同じ一八〇〇年にはもう、イギリスのカーライルとニコルソンがこの電池を使って水を水素と酸素に電気分解した。同じくイギリスのデービーは、一八〇七年、高温で融かした金属溶融塩の電気分解によってナトリウムとカリウムの分離に成功した。翌年にはマグネシウム、カルシウム、ストロンチウム、バリウムも分離され、新しい金属元素の発見が続いた。反応性が高く単体で

は存在せず、通常の製錬技術では金属として分離できなかった金属であった。

物質の電気分解は、電池とは逆に電気エネルギーを化学エネルギーに変換するものである。一八三三年、イギリスのファラデーは電気分解に関するファラデーの法則を発見、電気化学の基礎を築いた。

ファラデーはまた、一八三一年、電場と磁場の相互作用に関する電磁誘導の法則を発見した。その原理で、磁石の間に電気コイルを置き電流を流すとコイルが回転する電気モーターができる。電気エネルギーの力学的エネルギーへの変換である。逆に、モーターを力学的に回転させることができれば、力学的エネルギーを電気エネルギーに変換する発電機ができる。水力発電は水の落下のエネルギーが発電機を回転させる。火力発電は、化学エネルギー（化石燃料の燃焼）→ 熱エネルギー（水の沸騰）→ 力学的エネルギー（水蒸気が発電機を回す）→ 電気エネルギーへの変換である。原子力発電はどうか、ウランなどの放射性元素の原子核が崩壊する核反応によって核エネルギーが熱エネルギーに変換され、後は火力発電と同じしくみで発電する。いずれにせよ、人類の、実用的な電気エネルギーとの最初の出合いは電池であった。

（4）電池の進歩

ボルタ電池の発明後、電池は長足の進歩を遂げた（注1）。一八三六年ダニエル電池、一八五九年鉛蓄電池、一八六八年ルクランシェ電池（乾電池の原型）、一八八三年酸化銀電池、一八八四年水銀電池、一八九九年ニッケル‐カドミウム電池、一九〇一年ニッケル‐鉄電池の発明等々、実用化された電池のほとんどは十九世紀の発明であった。しかし、一九五一年、密閉型のニッケル‐カドミウム電池が発明されると二次電池の新しい用途が広がり、一九九〇年代にはニッケル‐水素二次電池に発展した。

一方、一九七〇年代には小型高電圧の各種リチウム電池が登場した。金属リチウムと有機溶媒電解質溶液を用いることで、3ボルトを超える高電圧と高エネルギー密度を持つ電池であった。

2　リチウムイオン電池の開発

リチウムイオン二次電池の実用化が急速に進んだのは一九八〇年代である。従来型の二次電池の電解質は水を含むため、水が電気分解される電圧（原理的におよそ2ボルト）より小さい1・5ボルトほどの起電力しか得られず、小型軽量化には限界があった。そのため、高電圧で、電気エネルギーをより多く蓄えまた取り出すことができるように、リチウム一次電池を二次電池に発展させる模索が始まった。今回、ノーベル化学賞を受賞した3氏は、リチウムイオン二次電池の実用化への各過程で画期となった成果を達成した人たちである。

（1）インターカレーション化合物を初めて利用

ウィッティンガムは一九七〇年代初め、正極に二硫化チタン（$Ti(IV)S_2 + Li^+ + e^- = LiTi(III)S_2$）を、負極に金属リチウム（$Li = Li^+ + e^-$）を使って充放電可能な新しい二次電池を開発した。二硫化チタンは層状の化合物で、層間のすき間にリチウムイオンが可逆的に出入りすることができることを利用した電池である。インターカレイトは英語で「暦にうるう（閏）として加える、間に入れる」を意味する言葉であり、インターカレーションとは層状の物質のすき間に他の元素等が入りこむ現象である。インターカレーション化合物（層間化合物）を電極に利用するウィッティンガムのこのアイデアは、その後リチウムイオン電池が実用化に向け大きく発展する方向を決定づけた。

（2）コバルト酸リチウムの正極への利用

グッドイナフは、一九八〇年、二硫化チタンより安定で効率的にリチウムイオンを出し入れすることができるコバルト酸リチウムを正極に利用する電池を開発した。コバルト酸リチウムは酸化力の強いインターカレーション化合物であり、これを正極に使うことで得られる電圧はウィッティンガムの電圧のおよそ2倍、4ボルトにもなった（$Co(IV)O_2 + Li^+ + e^- = LiCo(III)O_2$）。

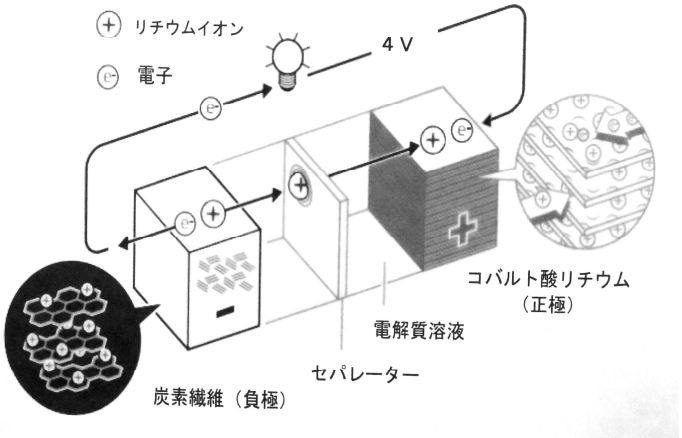
しかし、グッドイナフの電池の負極は、ウィッティンガムの電池と同じく金属リチウムであった。そのため充電を繰り返すと、これらの電池では負極に析出したリチウムが針状に成長し正極に達すると爆発してしまうなど、安全上の問題を抱えていた。

（3）吉野彰による炭素負極の開発―今日につながるリチウムイオン電池の原型完成

以上のような背景のもと、一九八〇年代初め吉野は、金属リチウムに代わる負極材料としてポリアセチレンリチウム化合物に注目した（$(CH)_nLi = (CH)_n + Li^+ + e^-$）。ポリアセチレンは、二〇〇〇年にノーベル化学賞を受賞した白川英樹氏が発見した導電性のプラスチックである。これを負極とし正極にコバルト酸リチウムを組み合わせると二次電池として機能した。しかし、負極材料としての安定性に問題があったため、さらに新しい材料の検討を続けた。そして遂に一九八五年、導電性プラスチックと構造の類似した炭素繊維を負極とし（$C_nLi = C_n + Li^+ + e^-$）、コバルト酸リチウム正極と組み合わせることで、充放電ともに長期にわたって安定的に動作するリチウムイオン二次電池の原型を完成させた。

吉野が開発したリチウムイオン電池のしくみを、スウェーデン王立科学アカデ

ミーの発表資料に基づいて示せば、次のような図になる。



負極に炭素、正極にコバルト酸リチウムを組み合わせたこの電池では、充電時にはリチウムイオンが正極から放出され負極に取り込まれる。逆に、電池として作動する放電時には、負極からリチウムイオンが放出され正極に取り込まれる。電池内部の電解質溶液は、リチウムイオン化合物の有機溶媒溶液である。

リチウムイオン電池は、電池内部でリチウムイオンが正極と負極の間を行き来することで電気エネルギーの蓄積と放出が繰り返されるという、まるで魔法の電池のように見える。それを可能にしたのは、正負両極ともにリチウムイオンを出し入れすることができるインターカレーション化合物が、その特性を見事に発揮し切ったからである。

もちろん、リチウムイオン電池の反応は酸化還元反応である。正極では、放電時にリチウムイオンの取り込みとともにコバルトは4価から3価に還元され、充電時にはリチウムイオンの放出とともに逆に酸化される。負極では、放電時にリチウムイオンの放出とともに炭素は電子を電池の外に放出して酸化され、充電時にはリチウムイオンの取り込みとともに炭素は電子を取りこんで還元される。

・・・

ウムイオンの数だけ、もう一方の電極に取り込まれるから、溶液中のリチウムイオンの数は不変である。電解質溶液中のX－イオンは電池反応に関与しない。

・・・

洪水などの「自然災害」「異常気象」、インターネット技術の発展によるグローバル社会の拡大とその反動としての「分断」「自国中心主義」の台頭など、自然と同じく人間も自ら「危機」を作り出して「安心」や「幸福」をつねに手の届かないところに移動し続けているように見える。その具体的実証が年初に起きたアメリカとイランによる「国家テロ」の応酬劇場である。さて恒例により今年の時事哲学テーマを検討してみよう。

（1）２０２０年の世界イベントでの哲学テーマ

世界レベルの年度スケジュールで、今年は重要な選挙が三つある。４月の韓国総選挙、９月の台湾立法議会選挙、１１月のアメリカ大統領選挙である。韓国の総選挙は任期５年の折り返しを過ぎた文在寅大統領への国民の中間評価になる。国内的経済問題を抱えた上での対日本への強権外交が信任されるのかどうかが気になる。このテーマは『歴史認識』の問題である。１９９６年以来の直接選挙よって総統を選んできた台湾では、年初１１日に現民進党蔡総統が信任された。この流れの中で今年９月には議会選挙が行われる。この流れとは、昨年から起こっている香港での自由確保への動向と連動している、『自由とは何か』である。アメリカの選挙は現トランプの信任を問う選挙になるが、これは「自国中心主義」を継続していくのかどうかを問うものにもなる。「自国中心」といっても中身は「白人中心」「覇権的アメリカ回帰」である。この問題は「アイデンティティ自己同一性」の問題とかかわる。つまり『私とは何か』である。「私が私」であると確信するためには「私は何者であるか」が問われる。自分自身のことを直接知ることは難しい。相対化、客観化してしか自分自身を知れないし、確信が持てない弱い存在である。自分がどの「人種、民族」「国家」「社会」「共同体」に所属するのかによって自分自身を決定する。しかし、一旦所属が確定すれば、それ以外の集団を排除することにより自分の「アイデンティティ」の確信を強めるのが今日の「排外主義」である。

スケジュール的にはその前の７月から９月までは東京オリンピックが開催されるが、日本での大問題は経済、政治など重要課題を置き去りにしたままの『祭りの後』であろう。

そして２０２０年最後のイベントは英国の「EU 離脱完了」である。「ブレグジット」は１月 31 日に実行決定され、残り１１か月で離脱後の協定交渉を終えなければならないということになる。ここに「英国のアイデンティティ」の問題が関係している。

さて、世界情勢での大きなテーマはこのほか「多国籍企業の責任問題」がある。これらのグローバル企業が「自由貿易」「気候変動」「貧困」「公正な取引」に貢献しているのかどうかが問われている。特に「GAFA」と言われるグーグルなどの企業はアメリカ資本であり、グローバル＝アメリカ化なのかが問われている。その動きに対するのが中国であり、「米中問題」は政治、経済、技術の問題に大きくかかわる「世界覇権問題」となっている。従来、対米覇権の問題は政治的には「東西冷戦」、いわゆる資本主義対共産主義の構造になっていたが、冷戦崩壊後「新冷戦」時代となり、構造は欧米世界対露、対中という構造に変化してきている。しかしロシアと中国は冷戦崩壊後１９９６年「上海協力機構」という軍事、経済等を含む包括的地域協力機構を作った。この機構はアジア、ユーラシア、中東と地勢的連関しており 2017 年にインドとその敵対している国パキスタンも同時に加わった。イランは現在オブザーバとなっているが正式加盟は間近い。このような地政学的構図の中で見るとアメリカ、ヨーロッパがこれらの地域を東西に挟んでいることになるが、経済規模や軍事規模では欧米は大きく引き離されてきている。欧米陣営によるイランや北朝鮮への経済制裁が何の効果ももたらさなくなってきているのはこれによるのが現実である。もはや経済力、軍事力という「力」による覇権は意味を失っているということに世界は早く気づかなければいけない。現在のインターネットでつながった世界システムは旧来の冷戦体制の時代とは根本的に異なっている。しかし、それらに取り残されたラテンアメリカ、アフリカ諸国の格差問題はこれも深刻になってきている。それらが複雑に政治問題と絡むことによって世界はまた混沌としてくるのであろう。

（2）『デカップリング：切り離し、非連動化』概念が支配する２０２０年

２１世紀 2000 年に入ってもう２０年過ぎているわけであるが、ここにきて『デカップリング』という概念が現実味を帯びてきた。この言葉は現在に至るまで統一的な概念になっていないが、すでに各分野では現実性を持っている。デカップリングは、一般的には、あるものと別のあるものが分離することを指し、「連動」（カップリング）していたものが連動しなくなる「非連動化」（デカップリング）という現象について用いられる用語として 2007 年に国際通貨基金（IMF）の世界経済見通しをきっかけに、「世界経済と米国経済との連動性が弱まる」という意味で用いられたことにより、一時、世界的に流行した概念となった。

その概念を「環境問題」に当てはめると、経済成長と CO_2 等の抑制、すなわちエネルギー消費を切り離して考えようというクリーンエネルギ革命などの技術的な問題となる。

また、「経済問題」になると二つのデカ

ップリングがある。一つは製造業と非製造業のデカップリングである。以前は、製造業の不振波及は非製造業へ限定的「非連動」だったのが、「非製造業」にも単独で雇用の伸びが低下している。これはAI（人工頭脳）による『第四次産業革命』の前兆であろうか。さらにこの傾向は景気が好転しても給料が上がらないという従来からの「非連動」も生み出している。二つ目のデカップリングは低迷する実体経済と好調な金融投機市場である。これはマネーゲームの再来であるが、ここには従来とは異なる「仮想通貨」の登場が影響していると思われる。いわゆる「電子マネー」は実体経済とリンク「連動」しているが「仮想通貨」はこれとは異なる。「仮想通貨」とは、国家に依存せずに流通する、非中央集権的な通貨である。国家の中央銀行が発行する通貨は、その価値を国家が保証している。それゆえに、経済が安定していて信頼のある国家の通貨は国際市場でも高値になるが、反対に経済が不安定な国家の通貨は、価値が低くなる。しかし、仮想通貨は、基本的にあらゆる国家や組織の管理を受けない「非連動」通貨であり、需要と供給のバランスによって、その価値が決まる。これも『デカップリング』の概念に該当する。

「政治問題」でのデカップリングは先ほど述べた「新冷戦体制」、つまり国際体制から「欧米以外」を「分離」し政治のみならず「経済」「技術」「秩序」からも『切り離す』という政策である。アメリカ主導によるファーウェイなど中国企業による技術標準からの締め出しなど、国際基準の主導をめぐる争いからの「分離」が狙いであろう。しかし、そのような分離に対してインターネットでつながった世界はなんの意味もない。そして決定的なのはその消費人口規模の逆転である。従来の冷戦体制はソ連と一部の東欧諸国、そして経済未発展の中国のもとにあった。それだから「冷戦体制」の「分離」は経済、国力と「連動」していたのだ。しかし、現在の両体制は逆転している。ヨーロッパ諸国は懐疑的であるが、それでもアメリカは中国の「分離」に固執しているし、日本も呼応している。先ほども述べたが、もはやこのような「力」による「分離政策」（デカップリング）はなんの効果もないということを早く知るべきであろう。

（3）産業革命の哲学

人類の歴史を単純化してみると、「自然―人間」関係としてみることができる。「自然」によって支配されていた「古代」、その「自然」を創造したとされる神によって支配された「中世」、そして人間によって「自然」を支配するようになった「近代」という区分である。「現代」はこの「自然」がより対象的な単純化された物質になり、人間はそこからエネルギーを引き出すだけでなく、細分化、分析していくことによりその「原理」を知ることから、「自然」を改変する技術を獲得するに至っている。その「自然からの搾取」の歴史は「産業革命」として語られている。

17世紀にデカルトが「我考えるゆえに我あり」という近代的人間世界観つまり「合理主義」を提言して以降、18世紀になりロックが「経験主義」を提説することにより近代自然科学の方法的確実性は根拠づけられた。それを完成したのがニュートンである。対象的自然を「経験する」すなわち「実験」をおこなってその法則を発見する帰納法、そしてこの法則を未知のものに適応する演繹法。これらの組み合わせにより「自然科学」の成果はより具体的に人間の目の前に提示された。それが18世紀後半からの「産業革命」である。

「第一次産業革命」は生産工場の脱人間化、蒸気機関などエネルギー革命による生産の「機械化」である。第二次産業革命は20世紀初頭におこった第二のエネルギー革命電力の利用による「大量生産」である。この革命の基礎の思想は「国富論」を著したアダム・スミスの経済学説に裏付けられる。その重要概念は『分業』である。『分業』とは、生産の全工程を分割し、異なった労働者によって分担されることと定義されるが、これは「個別的分業」を示す。これがまさしく「第二次産業革命」の「大量生産」を可能にさせたものであるが、しかし、この大量生産そのものを必要する社会的基盤は何であろうか。そもそも無人島や少数共同体社会では大量生産は必要ない。この生産が必要とされるには「市場」というものが形成されていなければならないし、しかも単一生産工場労働の個別的分業だけでなく、社会的総労働が各産業部門に分割・専門化されること、つまり「社会的分業」が成立していることが前提となる。さらにスミスの思想によると、人間は生産の一部分を担うことが、他人の利益に貢献する「互恵的」ということでなく、あくまで自分のために「利他的」に働くのだという。しかし、社会全体からみるとこれは『互恵的利他』として機能し「自分だけのために働いたことが、結果として全体のために働く」ということになるということだ。このスミスの思想は資本主義自由経済の基本思想「神の見えざる手」と関連している。つまり、市場における人間の自由な「私利的」経済活動が「神の見えざる手」によって全体としては最適な社会を生み出すという考えだ。非常に楽観的な考え方であると思うが、現在も新自由主義経済ではますますこれを根拠に市場が動いている。

さて「第三次産業革命」は1970年代初頭から現在まで続く電子工学や情報技術を用いた一層生産の『自動化』である。その思想概念は『情報』である。

『情報』とは何か。英語での「イン・

フォーメーション」は「フォーム」つまり、「形を与える」という意味であり、「知りえたこと」（知識）に対して「形をあえる」ということになる。「知りえたこと」とは、認識されたことであり、「見る、聞く」など「感覚器官」を通じて受け取られ、それは「言葉」であったり、「画像」であったり「書物」であったりして世界には存在する。この「情報」という概念は哲学的にはプラトンのイデア論との関連があり、「知りえるもの」つまり「認識対象」は真に存在するとのかという「存在論」につながる。産業技術として必要な「情報」は機械に対する「命令」である。従来の産業革命でも人間は機械に対する命令者として不可欠であった。しかし、その命令は実際に人間が介在して機械を操作しなければ実現しないものであったが、機械の自動化という命令情報をあらかじめプログラミング化して機械に覚えこませるという技術が開発された。これは、情報すなわち「言語命令」を電気信号に置き換える技術であり「デジタル革命」と呼ばれる。言語命令を論理化し、その論理を信号化することにより曖昧な主観的命令を機械も理解できる客観的命令に変換する「情報処理技術」の導入が『第三次産業革命』である。

『情報』という概念は産業における機械の命令に限定される必要はない。現代は情報時代といわれるように様々な人間活動の意思決定やその結果などに関する知識が社会に蓄積されている。デジタル化社会にあってそれらは「モノ」となり交換可能な価値を持つものとなりつつある。さらに、情報は生物の神経系伝達、そして細胞レベルでの遺伝子情報など「生命」を制御するものとして機能をしている。かつて「生命」は神のみがコントロールできるものであり、「死すべきもの」としての人間もその運命は「神の手」の中にあっが、現在は人間自身がその座を代わりつつある。

（4）第四次産業革命　AI 時代の哲学

2016 年スイスのダボスで開かれた世界経済フォーラムの年次会議で「第四次産業革命」がテーマとなった。それは物理的（モノ）、デジタル、生物圏（生命、自然）の間の境界を曖昧にする技術の融合によって特徴づけられる。ロボット工学、人工知能（AI）、ブロックチェーン、ナノテクノロジー、量子コンピュータ、生物工学、モノのインターネット（IoT）、自動運転車などの多岐に渡る分野においての新興の技術革新が特徴である。あれから5年経過後の２０２０年、周りを見渡せばこれらの技術は実現しているものばかりである。現代はすでに『第四次産業革命』に突入しているのである。

第三次産業革命までの技術の進化はいつも旧来型の産業を衰退させると同時に、新たな仕事を生み出し、結局は労働者の生産性や賃金を右肩上がりに増やしてきた。しかし、ネットが普及した２０００年ごろから生産性が上がっても賃金が上がらないという現象が起き始めている。経済は成長しているはずなのに労働者の給料が上がらない。これは過去の成長神話が崩れ、これまでの延長線上でない事態が起き始めているということかもしれない。AI やロボットが巻き起こす第４次産業革命では、雇用が増えず、賃金も伸びないという資本主義が根底から揺さぶられる事態が起こる可能性も指摘されている。

人工頭脳 AI は哲学を必要とするのかは、そもそも、人間こそが哲学を必要とするのかと同じ意味をもつ。「西欧哲学」が誕生して以来その関心は「真、善、美」と言われている。真善美とは、認識上の真理と、倫理上の善、そして、審美上の美という人間の精神が究極的に求める普遍的な価値のあり方を示す三つの概念である。『AI の知能、知性は真実を示せるのか』は「真」の問題を。『生命工学は人間に善であるか』は「善」を。『AI の仮想現実は自然美に代われるのか』は「美」の問題を扱っている。そのほか AI は『自然環境問題に対してどのような答えをもっているのか』そしてまた AI は『宗教にとって代われるのか』という問題を提示する。

以上、２０２０年年頭にあたり我田引水ではあるが、引き続き哲学の重要性がますます増しているという世界情勢の時事分析を今年も始めることにする。

大峯奥駈道（２８）

下村嘉明

私が尊敬してやまない戸田巽さんの事を詳しく書いてみたい。

平成２３年１０月２日、ヒルトン大阪５階・桜園の間で開かれた「天保山から富士山へ」米寿の挑戦の報告会で配布された資料を参考にして綴ります。

米寿に挑戦する男

（天保山から４８０km歩き富士山に登ります）

○僕の人生観

一度しかない人生だから、納得のいく人生にしたい。

○第二の人生は、自分の能力の範囲の趣味を楽しみ、節目・節目には自己満足の挑戦をすることを納得のいく人生としている。

○趣味は右脳に弱点があり、登山・スキー・切り絵・ウォーキングと運動に偏ってしまう。

○運がよく若い頃の腰痛以外は内臓疾患がなかったので

古希には、登山でキリマンジャロ（５８９５m）登頂

喜寿には、登山でアララット山（５１

６５ｍ）登頂。スキーで札幌国際スキーマラソン５０㎞完走

傘寿には、切り絵で個展を大阪で開催大勢の仲間に支えられて、挑戦の達成感を味わうことが出来ました。

○「夢を描き、挑戦し、凛として生きる」を信条としていた僕ですが、傘寿を過ぎたころから急に気力・体力が弱くなり、６１年間生活を共にした妻とも二人三脚・老々介護・独居老人主夫と目まぐるしい変遷で登山・スキーは遠のき、白内障で切り絵も中止、最後の趣味にした挑戦的ウォーキングも健康ウォーキングに弱体化しました。

○ところが、内臓疾患のないことを喜んでいた僕ですが、突然８４歳の時に悪魔が侵入、胃癌、腎臓癌を告知されました。病気はドクターの研究材料であり僕は無関係と非常識な割り切りかたをして３年、米寿の節目となってしまいました。

節目の挑戦は挑みたいので、弱弱しくなったウォーキングですが趣味の原点である登山と組み合わせて「米寿の挑戦＝天保山から４８０㎞歩き富士山に登る」を企画したようなところです。

どこでボタンの掛け違いをしたのか、僕の人生は挑戦で終わりそうです。もし、挑戦出来なくなれば、挑戦した記憶が僕を一生支えてくれるでしょう。

（報告会での配布冊子の前書きです）

この報告会に私も招待してもらい、スピーチもさせていただきました。１００名ほどの参加者で参加費は無料でした。すべて戸田さんが払われたそうです。

富士山に出発される日も、無事に帰られた時も店に挨拶に来られました。この時の戸田さんの身体は、体脂肪０％、体内年齢は４０歳台と言われてました。

次の号では、戸田さんが歩かれた富士登山迄の挑戦を日にちごとに歩かれた場所、距離、時間を書いてゆきます。

大人の今昔物語（六三）

石川　吾郎

今回は、極悪人が出家する話し。その一途さには感動さえします。教科書に出ない度は二／五。

讃岐の国多度の郡の五位、法を聴いてただちに出家した話し（巻第十九　第十四話）

今は昔、讃岐の国多度の郡、某の里に名前は知られないが源大夫（源氏で五位の者）という者がいた。その心ばえは極めて勇猛で殺生を生業のようにしていた。毎日のように朝から山野に出掛けて鹿や鳥を狩り、川や海に行っては魚を取っていた。さらに人の首を斬ったり足や手を折らぬ日は少ないという有りさまであった。仏法の因果の法を知らず、三宝も信じなかった。いわんや僧侶などというものは、ことさら毛嫌いをしてけっして近寄ろうとしなかった。このようにも浅ましい極悪人であったので、当地の人々も皆彼を恐れていた。

あるときこの男、配下を四五人ばかりを引き連れて、鹿などの獲物を数多く狩っての帰途、一宇の御堂に気づいた。そこに人が多く集まっているのを目にして、「これは何をしている所じゃ」と家来に問うと「これは御堂でございます。講を執り行っておるところ。講を行うとは、仏と経を供養することでございます。貴くありがたいものでござる」と言うので、五位「そのような事をする者があるとはかすかに聞いてはおったが、このようにも間近には見たことがなかった。どんなことを言いよるものか、いざ行って聞いてやろう。しばらくここで待っておれ」と、言い置いて馬を下りた。家来たちもみな下馬をして「これは何をなさるおつもりじゃ。講師を侮辱するのではなかろうか。お気の毒なことじゃ」と思っていると、五位はずかずかと歩み寄り御堂に入っていく。これを見てこの講の場に居合わせた者たちも、このような悪人が侵入してきたので「何をしようというのだろう」と、恐れ騒いだ。怖がってその場から逃げ出す者もいる。五位は座り並んでいる者たちを押しのけて入っていく。そのさまは風に草がなびいていて分かれるようであった。五位は高座の傍らにどっかと座り込んで、講師をにらみつけて言う。「講師は何ごとを言っておるのだ。わしが納得できるように説明してみよ。それが出来ぬようならただではおかぬぞ」と、腰に差していた刀を前に置き、それに手を架けていた。

講師は「よりによって悪い奴が入ってきたものだ」と怖じ気づき、今にも高座から引きずり降ろされかねない勢いなので、何をしゃべっているのか分からない程になったが、もともとこの講師なかなかの知恵者であったので「み仏よ助けたまえ」と念じて、答えて言う。「ここより西方角に多くの世界のかなたに、み仏はまします。阿弥陀仏と申されます。そのみ仏は、心広くして長年罪を重ね続けた者であっても改心をして一たび阿弥陀仏を唱えれば、必ずその人を迎えに来られて、極楽浄土、願い事がすべて叶う身として生まれ変わり、ついには自身が仏となるのでござる」と。

五位、これを聞き「その仏は人を哀れと思われるのならば、わしを憎まれるということはないのだな」。講師「そうでござる」五位「ならば、わしがそのみ仏の名をお呼びしたなら、お答えになろうか」

講師「それも心底、心を込めてお呼びするのであれば、答えられないわけはありませぬ」。
五位「そのみ仏は、どんな人を良しとされるのか」講師「その人が、他人より自分の子供を愛しく思のと同じように、み仏も誰をも憎くはお思いになりませぬが、仏弟子になった者を、とりわけよく思われまする」五位「仏弟子とはどんな者をいうのじゃ」講師「今日の講師のように、剃髪をした者はみな仏の弟子でござる。男も女も仏弟子ではあるが、なお剃髪をすれば、勝ることになりまする」五位、これを聞き「ならば、わしの頭を剃れ」と言う。講師「これは貴い心がけでございまするが、たった今にわかに頭を剃ることはできませぬ。まことにそう考えるならば、家に帰り妻子一族の方々と相談合意の上で、万事身辺を整理して後、剃髪されるべきでござる」と。
五位「貴殿は仏の御弟子と名乗り、仏の言葉に嘘はないと言い、御弟子になる者を哀れに思われると言いながら、たちまち前言を翻し、剃髪は後にせよとはいかなることか」と、五位は刀を抜いて自分の髻(もとどり)を根本から切ってしまった。

このような悪人がやにわに髻を切ってしまったので、この先どうなることかと、この講師も慌てて物も言えず、この庭に居合わせた者たちも大騒ぎになった。かつ五位の家来たちがこの経緯を聞きつけ「わがご主人に何が起こったのだ」と、刀を抜き矢を番えてどかどかと庭に走り入ってきた。主人はこれを見て大音声で家来たちを制して曰く「お前たち、わしがみ仏の弟子という素晴らしい身になろうとするのを、何を思って妨げるのじゃ。今朝までは、お前たちの上にさらに家来がほしいと思っていたが、これからは各々が自由に思う方に行き、これぞと思う主人に仕えよ。一人としてわしのそばに残ってはならぬ」と。家来たち「何ゆえにこのようなことを突然命ぜられるのか。正気の沙汰とは思われませぬ。物に憑かれておられるのではないか」と、皆が倒れ伏して泣き騒ぐこと限りない。
主はこれを制止し、切り取った髻を仏に供え、たちまち湯を湧かさせ、紐を解き襟元を押し広げ、自ら頭を洗い、講師に向かい言う。「これを剃れ。剃らねばただではおかぬぞ」と。「ここまで堅く心を決めたことを、ここで剃らねばどうなるものか分からぬ。また出家を妨げることになれば、それは罪にもなる」など、様々に頭を巡らした講師は、高座から下りて剃髪をしてやり、戒を授けた。家来たちは涙を流し嘆くこと限りない。

その後、入道となった五位はそれまで身に付けていた水干袴を、そまつな布衣・袈裟などに着替えた。携えていた弓と胡録(やなぐい)などを鉦に替え、衣・袈裟をきちんと着て、鉦を首にかけて言う。「わしはこれより西に向かい、阿弥陀仏をお唱えし鉦を叩き、み仏のお答えがある所まで行くことにする。お答えのないかぎりは、野山でも海や川でも、引き返すことはない。ただただ、西方に向かって進むだけだ」と言い、大音声で「阿弥陀仏や、ほーい、ほーい」と鉦を叩きながら出発する。家来たち、これに従おうとすると「お前たちはわしの行く道を妨げようとするに違いない」と、殴りかかろうとするので、皆留まった。

こうして、西に向かって、阿弥陀仏をお呼びして鉦を叩きつつ進んでいったが、まことに言っていたとおり、水が遮っていても浅瀬を求めるではなく、高い峰がそそり立っていても迂回することもなく、倒れまろびながらも西方にまっすぐに進んだ。すると日が暮れて一つの寺のあるところに行きついた。その寺の住持の僧に向かって言うには「わしは阿弥陀仏の元に参じることを発心して西方に向かうに、脇目もふらず、ましてや振り返ることもしない。ここより西の高き峰を超えていこうと思う。今から七日してから、わしが居そうな所を必ず尋ねてきてくだされ。草を結びつつ行くので、それを目印にして来てくだされ。もし食料があれば、それを少々だけいただけまいか」と言うので、僧は干し飯を取りだして与えると「多すぎる」と、少しだけを取って紙に包み腰に挟み、その堂を出ていった。住持は「すでに夜になってしまった。今夜は泊まって休んでいかれよ」と留めるが、聞き入れず出発をした。

その後、この住持は例の約束の通り七日目になったので、入道の後をたどってみると、話しの通り草が結んである。それをたどって、この峰に登って見渡せば、西方に海が見えるところがある。そこに二股になっている木がある。その二股に入道が登り鉦を叩いて「阿弥陀仏や、ほーい、ほーい」と叫んでいる。住持を見て入道、喜び「わしはこれよりさらに西に向かい、海に入ろうと思いましたが、ここで阿弥陀仏がお答えになったゆえ、今お呼びしているところなのじゃ」と言う。住持はこれを聞き不思議に思い「どのようにお答えされましたか」と問えば、「それではお呼びしよう。これを聞かれよ」と「阿弥陀仏や、ほーい、ほーい。今どこにおわします」と叫べば、海の中から素晴らしいお声で「ここに居る」と答えられたので、入道「これをお聞きか」と訊くので、住持はこのお声を聞き、あまりの貴さに感激して、その場に倒れ込み泣くこと限りない。入道も涙を流して曰く「貴殿は速やかに帰りなされ。この後さらに七日目にまた来られて、わしのさまを見とどけてくれ」「何か食料と思い、干飯をもってきております」と住持が言うと、「いまだ何も欲しいものはない」と

答える。住持が見ると、なるほど以前渡した干飯はそのままにまた腰に夾まれてある。こうして後世での出会いを約束して住持は帰って行った。

その後七日経ち、住持が行ってみると、入道は七日前そのままに木の股に西方に向かった姿であったが、この度は死んだ姿であった。よく見れば、その口からは鮮やかな蓮の花が一つ美しく生え出ている。住持、これを見て泣き悲しみ貴び、口から生え出たその蓮の花を折り取った。亡骸を埋葬しようかと考えたが、このような人物はこのままにして、鳥や獣に喰らわれることを望んでいたのかも知れないと思い返して、亡骸はそのままにして、泣く泣く帰途についた。

その後、どのようになったのかは、分からない。必ずや極楽往生を遂げた人にちがいない。

この住持も阿弥陀仏のみ声をお聞きし、口から生え出た蓮の花を折り取ったのは、定めてこの住持も罪びとではあるまいと思われる。この蓮の花がその後どうなったのかは知られていない。

この話しは、それほど昔のことではない。某の時代のことであろう。末世になったといえど、まことの発心をおこせば、このような貴いこともあることだと、伝えられていることだ。

《コメント》

この主人公・源大夫（五位）の一途な行動は、現代に暮らす我々自身にも周囲にも見ないもので、強烈で爽快な印象を残します。これほどの、突き抜けて命を掛けた「思いこみ」は、それはそれで幸せだったのではないでしょうか。これほどの話しにはなかなか巡り会えるものではありません。

さらに私は、この五位の姿を立ち会った周囲の者たちの目線で見たら、どう見えるかが気になります。一番の大きな影響を受ける家来たち。また講師。この場に居合わせた庶民の信者たち・・・、と思っていると、芥川龍之介がまさにそれを実行していました。

『往生絵巻』という短い演劇仕立ての作品で、この今昔物語の他の話の中で登場するさまざまな庶民、鮓売りの女、薪売りの翁、菜売りの媼、物詣の女房、水銀を商う旅人、青侍といった人物に、この五位の姿を論評させているのです。しかし残念ながらこの作品はちょっとしたコントの域を出ていません。

この話しの舞台になっているのは讃岐、今でいう香川県の多度ということで、そこから西方へ行くと見えてくる海は瀬戸内の燧灘(ひうちなだ)、あるいは徒歩で七日の行程を考えれば四国の西端部伊予灘を望むのではないかと推定されます。

B級サラリーマン渡世譚（７８）

明石　幸次郎

担当者の役割（韓国編　その３０）

N川との雑談を終えた後、９時近くになったので、慌てて、宇都宮工場のＳ沢に電話を掛けた。

「お世話になります。明石です。Ｓ沢さん、例の件、納期短縮は大丈夫ですね？」と言うと「ああー、ゴメン！まだ、確認していない。朝一から、本部の推進部から、Ａ木課長、Ｓ島係長、Ｗ辺さんの３巨頭が来てて、９時からの会議の準備でバタバタしていたので。まっちゃんに確認してから、折り返し電話します」と答えたが、明石は「忙しそうですので、Ｍ本君には、直接聞きましょうか？それにエライ重要な会議なんですね？テーマは何ですか？」と問うたら、

「ああ、納期の件、そうしてくれたら、助かります。それと会議は田植え機のフルモデルチェンジの審議会で、国内営業本部長はじめ、工場長、各部門長が出席される、言わば、御前会議見たいなものです」と答えた。

「それでは、来年の中国向けのモデルも新型モデルになるのですか？」と疑問を投げかけると「いや、それは、何とも言えない。まあ、輸出機種は使用条件が国内とは全然違うから、新モデルをそのままの仕様では輸出できないね。別途、取り決めをしないと駄目よね。まあ、どうするか会議で問題提起しておきます」と言われた。

明石は、輸出機種は会議では議論されなく、国内中心で１００％物事が動いているようで、生産の９５％以上が国内販売である現実は受け入れなければならないのだが、少し腹が立つと同時に輸出の為の新たな問題が発生したと思った。

それで「改めて、相談に乗ってくださいね」と、Ｓ沢に中国向けに関心を持って貰い、いざとなれば、味方になってもらうおうとお願い口調で話し、電話を終えた。

新機種の輸出は、クレームが発生した時の対応能力を考えて、100 台以内という社内規定が設けられている。この規定に縛られて、現行のモデルが生産できないと新型を１００台しか輸出出来なくなる事もあり得ると思い、これは大きな問題になりかねないと考えたが、先ずは資材課のＭ本に電話をした。

「おはようさん！明石です。Ｍ本、納期の件でＳ沢さんに電話したら、会議の準備で時間がないので、君に直接聞いてくれと言われたので、電話させて貰ったよ。例の件、いけそうかなあ？」と尋ねると「あー、あれなぁー。何とかなりそうや。お前に言われた様に数％値上げしたので、単価改訂やってくれよなぁ～頼むぜ」と予想した回答が返ってきた。

「明日から韓国に行くので、良かった。

まあ、頑張ってくるわ！処で、今日の会議やけど、新型モデルチェンジの審議会らしいなぁ。審議会に通れば、来春からは、生産は全て新型になるんか？輸出機種だけは、現行機種を来年も生産してもらえることは可能かなぁ？」と尋ねた。

M本は、だるそうな声で「それは、どういうことや？残せと言えば交換部品は、10年近く持って置かないといけないので物理的には可能だが、本生産となると内作部品もあるので、最低ロットは千台以上が目処かなぁ」と明確に答えてくれたので、「分かった。中国向けや。今春は4千台近く出たから、来春もそれ位は見込めとして、決まったら、生産はやってくれるよなぁ？」と言うと、

「正式には工場長の許可がいるでなぁ。それは、分かってくれるよなぁ」と返された。「それ位は、俺でも分かってるぜ。処でお前、二日酔いか？しんどそうやなぁ」「分かるか？この仕事をやっていたら、ストレスが溜まるよなぁ。酒位飲まないとやってられんぞ！お前の宿題が片付いたと思ったら、又、宿題が出てくる。宿題が終らないよな。堺の資材にいた頃は、宿題に追われて、ストレスが溜まったやろ？ストレス解消、どうしてたんや！」と質問された。

「俺は、君と違って元々、酒が弱いので、ストレスの解消に酒は駄目やった。U島さんと言う、筑波工場から来た腹の据わった先輩に問題を聞いてもらってたなあ。それに、宿題で追い詰められても、楽天的か何とかなるやろと言う考えで、やってたな。

部品の遅延で生産ラインを止めた時も、それは、大変な騒ぎに成ったが、考えてみたら、俺の能力不足とかミスが原因で部品が入って来なく、ラインが止まった訳ではないので、居直ってやったね。工場は大人しく黙って、自分だけに責任があるという態度を見せたら駄目やなあ。起こった問題の本質的な原因は何かを話し合わず、問題を作った当事者だけをスケープゴートにして、問題を解決した事にしてしまう所があるよな。それで、当事者が真面目であれば、あるほど、最後は会社を休まないといけない破目になってしまう。まあ、君はそんな事はないと思うし、行きつけのスナックで酒を飲みながら、可愛いママに話を聞いてもらって、ストレスを解消しているんやろ？それも、エエやないか」と言うと、

「お前、それも大変やぞ！毎晩行ってると、金が掛かってしょうがないぞ！」

「まあ、それで、ストレス解消が出来たら、出社拒否症で独身寮に篭っているよりは健全やないか？」と言うと

「現場の作業長から呼ばれているから、電話切るぞ！まあ、頑張ってきてくれ！」と最後は激励されて、電話を終えた。

明石は、これで、何とか値上げは出来るのではと、楽天的に自分に思い込ませた。

オクラの山たより（40）

困了生

一

先回、「菜の花や」で有名な句を見落としていたので、そこから今回は始めます。句の作者は松尾芭蕉（一六四四～一六九四）と同時代に生きた俳人池西言水（いけにしごんすい　一六五〇～一七二二）。

「菜の花」に関わる言水の句は

菜の花や　淀も桂も　忘れ水

です。「忘れ水」とは、野原の中の流れが草に覆われて人に知られないようになっていること。菜の花が一面に咲いていて淀川・桂川さえも見えないという句意ですが、この風景は一体どこから見たものでしょうか。木津川・宇治川・桂川の三川が合流する大山崎の天王山か八幡の石清水八幡宮あたりから見下ろせば、このように見えるかもしれません。しかし、江戸時代の人はそう考えなかったようです。蕪村の死後夜半亭三世となった高井几董が面白いことをいっています。ある日、蕪村等と清水寺の閣上から淀・八幡あたりの春色を望見して、この言水の句の通りであると感じて、後に

「今の人とても、菜の花に淀も桂も、とまで思ひよるべし。『忘れ水』とたしかに置くこと難し。」と

と彼の著作の中で激賞しています。

几董の感激はともかく清水寺から淀・八幡あたりの風景が見えたかどうか。最近、とみに視力が厳しくなっている筆者にはまず無理です。三川合流あたりの大景を十七字でまとめきったのは「お見事！」というべきでしょう。しかし、蕪村ファンの筆者としては月が登りつつあり陽が沈みつつある時間の流れ、そして東から西へと視線の移る空間の広大さ、それを一句にまとめた蕪村に「こっちの方がやっぱりすごい」とつい肩入れをしたくなります。

名前が出て来たついでに言水の句を一句紹介します。

木枯しの　果てはありけり　海の音

これは言水の句の中で最も有名な句。ために言水は「木枯しの言水」という異名をとりました。

見落としていた句をもう一つ。談林風俳諧の祖といわれる西山宗因（一六〇五～一六八二）の句です。

菜の花や一本咲きし松のもと

一本は「ひともと」とよみます。この句はまったくの客観句といってもよく芭蕉をこえて蕪村にまで接近しているともいえます。時代を超えたといいうる俳人で

した。後代の言水が見た桂川・淀川を隠すほどの菜の花はまだ目にしていなかったようです。

二

藪入りの　宿は狂女の　隣かな

安永八年の作

これは蕪村六十四歳の句ですが、「狂女」という語に驚かされます。筆者の知る限り「狂女」という語は俳句ではめったに使われません。しかし、蕪村には現在まで伝わっている千五百余の句の中に筆者の知る限り六句あります。その中で有名な句は

岩倉の　狂女恋せよ　ほととぎす

です。この句には蕪村自身が描いた俳画があり、それは縦四十センチ・横六十センチの横長画面右上に鳴きながら飛ぶホトトギス、左下に藍の施された紫陽花が描かれ、その間は余白として残された絵です。句はホトトギスの真下あたりに控え目に書かれています。

鳴いて血を吐くホトトギス。そのホトトギスと狂女とは響き合うかもしれません。また、岩倉と狂女とは深い関係があります。平安時代以来、洛北岩倉の地にあった大雲寺は精神病患者の療養地として知られていました。それで岩倉と狂女との結びつきはそれで分かるのですが、「狂女恋せよ」と呼びかけている蕪村の真意は一体何なのか。筆者なりの私見はあるのですが、よく分かりません。少なくとも狂女への恐れや蔑みの気持ちはこの句からは感じられないのは確かです。同じように「藪入りや……」の句にも狂女への強烈な拒否感のようなものは感じられません。蕪村と狂女との関わりはどうなっているのか。少し探ってみようと思います。

一七一六（享保元）年、蕪村は摂津国東成郡毛馬村に生まれました。父親は毛馬村の村長を務めていたらしいとされています。その根拠として大きな意味を持つのは蕪村の高弟である几董の「夜半翁終焉記」の草稿です。定稿では「おしてるや浪速江ちかきあたりに生たちて」となっている部分が草稿では「おしてるや浪速津の辺ちかき村長の家に生ひ出でて」となっています。さらに草稿で見過ごせないのは定稿では書かれていない二人の姉がいたという記述です。これによって生家の家族構成の一部がわかります。

父親が村長であったこと、二人の姉がいたことを几董が定稿とするにあたって最終的に消したのは、おそらく自分の出自をどうしても隠したいという亡き蕪村の気持ちを几董が忖度したためでしょう。しかし、そのためかえって草稿の内容が真実であったことを示唆しているように思えます。

父親は村長をしていた毛馬村の有力者であったことは分かるのですが、では、蕪村の母親はどのような女性だったのでしょうか。

現在の京都府北部の与謝野町二ツ岩神社（旧野田川町にあります）に地域の人たちが大切にしてきた蕪村の母親と伝わる墓があります。墓石にはかなり摩滅していて読み取りにくいのですが、「月堂妙覚禅定尼」と確かに刻まれています。地域の伝承では母親の名前は「谷口げん」。享年は三十二歳と伝えられています。当時の平均寿命は四十歳ほどですから少し早い死でした。

母親が亡くなったのは蕪村が十三歳のとき。蕪村が一七七七（安永六）年に母親の五〇回忌追善供養をしていますから、このことはまず間違いない事実でしょう。

蕪村の出生地を蕪菁（カブ）で有名な天王寺村であるという誤りを除けばおおよそ正確な内容とされる金福寺の「蕪村翁碑文」には「（蕪村は）幼くして母氏の家に養われ、（母氏の）生家は丹後国与謝郡にあり」と書かれており、与謝野町の墓も一方的に信用できぬ伝承とはいえません。

丹後国の与謝に生まれた蕪村の母親は大坂の毛馬村まで年季奉公人として出たと多くの研究者は考えています。そして、奉公人として働く間に村長をしていた家の当主に見そめられて一子をなし、その子が蕪村というわけです。その後、母は何らかの事情で蕪村の父親と離別して故郷与謝に帰り蕪村を養育したとされています。

三

ここで蕪村の母親をめぐる当時の社会状況を少し見てみます。

江戸時代には宗門改帳がかなり正確に作られ、同時代の西欧と比べてみてもかなり正確であるとされる戸籍および住民の移動についての書類が全国で数多く残っています。また、村役人を務めていた人たちの詳細な日記も数多く残っています。これらの史料の詳細な検討から当時の農村の女性のライフ・コースがずいぶんと分かってきました。

当然のことながら農村における女性のライフ・コースは上層農民と下層農民とではずいぶんと違っていました。

庄屋などを務めていた上層農民の娘は家で家事手伝いをしたり、近隣の寺子屋に通ったり等の教育を受けるほか、結婚前の一時期武家屋敷へ奥方向にあがることも広く行われていました。奥奉公の場合、一般的には給金が目的ではなく、女性としての行儀作法や教養などを身につけるために送り出されたのですが、親元では支度金や付け届けなど相当な出費を

強いられました。

そして二十歳前ぐらいで結婚。七、八人の子どもを産みますが、産んだ子の半数は成人にまで生き残ることはできませんでした。そして、生き残った二、三人の子供を育てつつ、家長の妻としての役割を果たしていく人生を送ったようです。家の中の役割といってもその範囲は限られており、一般に家業・家産を維持し責任を持つのは夫であったこの時代にあって妻がなしえたことは女性の奉公人たちを指図・監督しながら自らも実際に家事労働に従事することであったでしょう。

これに対して下層農民の娘たちはかなり早い時期から家事手伝いや家の農作業の手伝いなどをしていますが、十五歳くらいになると奉公に出されました。美濃国安八郡西条村の史料によれば安永二年から文政八年（一七七三～一八二五）の間に生まれた村民で男性は五〇・三パーセント、女性は六二・〇パーセントが方向に出た経験を持っています。これは上層と下層農民こみの数字で下層農民では七〇パーセント前後が奉公に出ています。美濃国安八郡西条村の史料によれば奉公先は大坂、京、名古屋とかなり広範囲となっています。

こうして都市に奉公に出た者の何割はそのまま帰ってこないこともあったのですが、女性の場合、多くは二十五歳くらいまで十年ほど勤めた奉公をやめ実家に帰り結婚ということになりました。

蛇足ですが、上野国那珂郡下江戸村の那珂家の記録に蕪村の母親が奉公していたときに手にした給金の状態が類推できる記述があります。それによれば年季奉公人の年間の平均賃金は男性では二両三朱（一両＝十万円換算で二十一万八千七百五十円）、女性では一両二分二朱（十六万二千五百円）でした。女性は男性の四分の三ほどの給金ですが、これは農作業や醸造業などの生産労働に携わる男性と家事労働中心の女性の労働を反映したものでしょう。住み込みの家事労働ですから粗末ながらも衣食住は不自由しなかったでしょうが、一ヶ月一万三千円ほどの賃金をどう見るか。今から見れば小遣い程度ということになるかもしれませんが、現金収入の乏しい下層農民にとっては貴重な収入だったと思えます。

余談ですが一七〇七（宝永四）年におきた富士山噴火での復興事業、それは農作業のできなくなった農民たちへの救済策でもあったのですが、被災地から徴募された人夫に対して一人一日につき銀二匁五分の賃金を幕府は支払っています。当時としては四升（約六キログラム）の米が買える見当の金額です。これを年季奉公の給金と比べれば、いかに破格の賃金で被災民の救済と被災地の復興を目指したかが分かります。

四

蕪村の母親は毛馬村の村長の家で年季奉公人として家事手伝いを中心にして働いていたのではないか、と一般にはいわれています。人手の足りない時には菜の花の収穫作業にも携わったかもしれません。

菜の花栽培の広がったこの時代すでに「石代納（こくだいのう）」という年貢米を銀や銭に換算して収めるという方法が一部でとられていました。もともと上方では村高（村の中の田畑屋敷地の面積を石高に換算したもの。年貢等の基準数とされた）の三分の一を畑と見なして年貢米の三分の一を銀納させる三分の一銀納制が早くから行われていました。村の村高は大きく変動しませんから商品作物を大量に集約的に作った方が収入は大きくなります。十八世紀初めには既に商品作物である菜の花や綿花に対して雑税がかけられていたかもしれませんが、農家にとって大きな収入源となったことでしょう。この時期に菜の花畑が増えていった一因です。

こうして春になれば一面に菜の花の広がる淀川のほとりの一角で、十代の後半の蕪村の母は年季奉公人として働いていたかもしれません。

蕪村の母がどういう経過で蕪村を産むことになったのか、そして、どうして無事に産むことができたのかはまったく分かりません。主人と奉公人の間に生まれた子が出生直後に「押し返し（あの世にもう一度押し返すこと。間引きのこと。）」されることはよくあることでした。そして蕪村自身が語った「余、幼童の時、春色清和の日には必ず友どちとこの堤上にのぼりて遊び候」という内容が真実とすれば「幼童の時」ひどく冷遇された暗い記憶があったとは考えにくく、庶子ではなく実子並みに扱われていたのではないかとも思えます。

月渓（呉春）や上田秋成などの蕪村の友人たちがまだ生きていた時期に大坂で出版された田中橘庵の「烏呼矣草（おこたりぐさ）」に「蕪村は父祖の家産を破敗させたという記述があります。蕪村関係者の生きていた時代に、しかも大坂で出版されているので、この記事はかなりの真実性があると考えられます。そうすると蕪村は十八、九歳には江戸に出ているので十代の半ば頃には与謝から呼び戻されて村長の家の跡取り息子となっていたことになります。

もう一つ話を付け加えると蕪村の母親は年季奉公人として働いたのかどうか、筆者は疑問に思っています。後で述べるように与謝に帰ったあと蕪村の母親は少年時代の息子に和漢の学や絵画を学ばせています。特に絵画は七、八歳の頃から専門家のもとで習わせています。これからすると当時としては大変に教育熱心な母親であったわけで、彼女自身も一定以

上の教養ある女性であったらしいと推察されます。当然、息子へ寄せる思いの熱さのため教育費もかさんだでしょう。小百姓・小作人といった下層農民ではとてもそんな余裕はなく、十歳前後ともなれば子供も大人並みに重要な労働力となって働いていました。以上からすると蕪村の母親の生家はそれなりの収入がある農家であったと思われます。毛馬村村長の家へは上層農家の娘と同じく年季奉公ではなく行儀見習いに行ったのかもしれない、いやひょっとしたら正妻もしくは後添えとして行ったのかもしれないと筆者は想像をしていますがどうでしょうか。

話をもどしますと、どのような事情があったかはまったく分かりませんが、毛馬村の村長と蕪村母親とは離別しました。たぶん蕪村五、六歳の頃です。

先ほど述べたように故郷与謝に帰った蕪村の母親は我が子に熱心に教育を施しました。後の蕪村の和漢の知識や画業をみればその教育のほどは相当のものであったでしょう。

几董の「夜半翁終焉記」には「この翁、無下にいはけなきより画をこのみ、年を積み、……つひに筆あり墨ありの妙にいたれり」と書かれています。「無下にいはけなきより」とは「大変に幼い頃から」の意味ですから七、八歳の頃、つまり小学校一年生ころには、もう絵ばかり描いている子どもであったということになります。

門人川田田福の記事によれば、この少年蕪村に母親は与謝に折しも滞在していた桃田伊信（ももたこれのぶ）という画家に絵を学ばせています。桃田伊信は大和絵風を加味した狩野派の画家でしたが、一七六五（明和二）年に摂津の池田で没した以外によく分かりません。この伊信のもとで蕪村は画家としての基本的な技法を身につけていったのでしょう。

このように教育熱心な母親のもとで蕪村はしっかりと和漢の学や絵画を学んでいきました。そして十三歳で母親の死を迎えます。

五

母親がどのような死を迎えたかについて蕪村自身は何の痕跡も残してはいません。そのため、以下の内容は最近出された論文を参考にした一つの私見として読んでいただけたらと思います。

さて、一七七七（安永六）年、亡母五〇回忌追善供養のために句日記「新花摘」を六十二歳となった蕪村は書きはじめました。その同じ年の春興帖「夜半楽」に「春風馬堤曲」を蕪村は載せています。

よく知られているように「春風馬堤曲」は発句体、漢詩の絶句体、自由律詩体などが入り交じった詩です。藪入りで帰郷する娘の気持ちを代弁したものしながら、実は作者自身の「懐旧のやるかたなきよりうめき出たる実情」であると門人への手紙でうちあけています。この「春風馬堤曲」の末尾を大の次の句で結んでいます。

藪入りの　寝るやひとりの　親の側

「親」という語がありますが、この句の直前に「戸に倚（よ）る白髪の人弟を抱き我を待（まつ）春又春」とあり、「戸に倚る」が元政上人の「遙かに識る（母の）門に倚り　我が帰るを望むを」（『草山集』所載「対月思帰」）からとったというのが定説です。つまり、「親の側」とある「親」とは母親のことです。ここで最初にあげた句を思い出してください。

藪入りの　宿は狂女の　隣かな

「藪入りの寝るや」と「藪入りの宿は」の部分は同趣旨です。「親の側」は母親の側ということですから「狂女の隣かな」と対応しています。同じ春興帖「夜半楽」で門人の几董は

藪入りの脛おしかくす野風かな

という句を発表しています。「脛」は「はぎ」とよみ、春風のイタズラで着物の裾を吹かれ白いふくらはぎをちらつかせて藪入りの女性が故郷へと急ぐ情景で、少々色っぽい句ですが、「春風馬堤曲」を意識しての句に違いありません。ここからあとは想像に近いのですが、蕪村の「藪入りや……」の句も「春風馬堤曲」の太祇の句を意識して句であろうと考えます。

そして、気になるのは「狂女の隣」の「隣」です。隣家。隣の部屋。隣の寝床。三通りの解釈が可能ですが、「隣家」はともかく残りの二つの解釈では同じ家に狂女がいたことになります。そして「親の側」が「母親の側」となると狂女は母親であったとなります。それは蕪村が最後に見た母親の姿だったかもしれません。

以上の考えは筆者の想像・妄想にすぎないかもしれませんが、こう考えると蕪村の句に詠まれた「狂女」のイメージに恐れや蔑みなどはなく、清らかさを加味した寂しさとある種の危うさが漂っているのが納得できるのです。

六

母親の死因についてはよく分からないというほかはないのですが、気になる説があります。その説によると母親は入水自殺をしたというのです。詳細はくどくなるので省きますが、蕪村には

枕する春の流れやみだれ髪

という句があり、「枕」に水の「流れ」から夏目漱石のペンネームの由来ともなっ

た「漱石枕流」という故事からできた句と解釈できそうです。

しかし、それでは句末の「みだれ髪」がスッキリしません。これを入水自殺した女性のイメージと考えれば、なるほどとうなずけます。春水の流れを枕にして寝ているかのように黒髪を玉藻のごとくなびかせて安らかに流れていく、美しい女性の入水のイメージです。そして、やはり流れていく女性には狂女のイメージがあるといえそうです。シェイクスピアの悲劇「ハムレット」のオフェーリアのように歌を口ずさみながら花とともに水に浮かんで流れていくイメージに近いのでしょうか。

以上、蕪村の母狂女説、ならびに入水自殺説と紹介してきましたが、確証・傍証といえるものはほとんどなく筆者自身「蕪村の父母のことは未詳というのが良心的かな」と思っているのが正直なところであると打ち明けねばなりません。しかし、少しショキングなことではありますが、このように考えていくと「狂女」という不似合いな言葉をあえて俳諧に用いた蕪村の心に少しは寄り添えるのでは、と考えてはいます。

【　補足　】

◇「狂女」の句について

蕪村が「狂女」という語を用いた句は筆者の見る限り次の通りです。

①岩倉の　狂女恋せよ　ほとぎす
②藪入りの　宿は狂女の　隣かな
③昼舟に　狂女のせたり　春の水
④更衣　狂女の眉毛　いはけなき
⑤接待へ　よらで過ぎゆく　狂女かな
⑥麦の秋　さびしき顔の　狂女かな

①と②の句は本文で詳述済みですので説明は省きます。

③は謡曲「隅田川」を踏まえた句。謡曲「隅田川」は京の北白川に住む女性が一人子を人商人（ひとあきんど）にさらわれて、そのいとしい子を尋ね歩くうちに物狂いの狂女となり、数年後の春、武蔵国の隅田川にたどり着いて、そこで子どもの梅若丸の死を知るという話です。春の水が流れている隅田川で渡し船の船頭が狂女の身の上話を聞き、舟に乗せ梅若丸の墓まで連れて行くという役回りを演じています。この句の「狂女」はいとしい我が子を探し求める間に物狂いした女性なのです。

④の句は「更衣（ころもがえ）」の時期となり夏の白い袷を着ている狂女の眉毛が「いはけなし」つまり眉毛がボウボウと生えていてまるで子どものようだというのです。狂女を純真な童女のように扱っている句ですが、この狂女に対して作者は恐怖感・嫌悪感・侮蔑感を抱いているとは思えず、むしろとてもいとおしく好意を感じているように思えます。

⑤の句で「接待」とは「摂待」のこと。七月に寺院や往来で湯茶の施しをする行事のことです。湯茶の施しをしていても知らず通り過ぎて行く狂女に同情の気持ちは感じられても嘲笑しているようには思えません。

⑥の句にある「麦の秋」とは「麦秋」つまり春のことです。春は農家にとって麦刈り苗床作りと大変に忙しい時期です。その農繁期とはまったく無縁な存在の狂女。それはひょっとしたら蕪村の記憶に強く焼き付けられた母の最後の姿かもしれません。「さびしき顔」に作者の思いがつまっているようです。

以上、「狂女」に関わる蕪村の句を見てきましたが、これらの句には狂女への恐怖感・嫌悪感・蔑みといったものはありません。あるのはむしろ親しげともいうべき感情です。「狂女」に十三歳で亡くなった母親の面影を重ねているとしたら、そういう感情も理解できるではありませんか。

岩倉の狂女に向って血を吐きながら啼くというホトトギスと同じほどに激しく思いのたけを訴えよ、ノドから血を噴き出すほどに、と詠んだ蕪村の句に筆者はどうしても母親の姿を重ねてみてしまうのです。

隠された歴史（１５）

満田正賢

今回は四天王寺と前期難波宮に関する隠された歴史について考察します。大阪市中央区の法円坂にある難波宮跡からは前期の宮殿と後期の宮殿が見つかっています。後期の宮殿は奈良時代の神亀三年（七二六）に聖武天皇が建設したものです。前期の宮殿については従来天武天皇が天武十二年（六八三）に飛鳥の副都として建設した宮殿であるという説が有力視されていましたが、現在では孝徳天皇が白雉三年（六五二）に完成させた難波長柄豊崎宮であろうという説が有力となっています。今回触れる前期難波宮とは孝徳天皇が建設した難波長柄豊崎宮のことです。

最初に榊原史子氏という研究者がまとめた「四天王寺縁起の研究―聖徳太子の縁起とその周辺」（勉誠出版）という本に書かれていることをご紹介します。

まず、四天王寺縁起の作成時期と作成目的について榊原氏はこう述べています。

①四天王寺は天徳四年（九六〇）に火災に遭遇し、「田園」「食封」などの履歴を明らかにする資料が失われ、新しい資財帳が必要とされた

②再建された新しい伽藍にふさわしい縁起の存在も必要とされた。

③聖徳太子の名を借りて寺院運営の細部

にわたって指示を記し、寺院運営の円滑化を図った。

④寛弘四年（一〇〇七）に原本が発見されたという奥書をもつ写本がある。従って四天王寺縁起の作成時期は九六〇年から一〇〇七年の間と考えられる。

次に榊原氏は四天王寺縁起の真実部分を以下に分析しています。

①宝塔、宝物、食封、田園の記述は作成当時の現状が記載されていた。（＊飾磨郡に所在した墾田の規模は続日本紀の記述とほぼ一致する。）

②四天王寺縁起に記された河内国や摂津国の所領は物部氏の旧領と考えられる地域と重なり、これらの所伝の多くは、かつては実際に物部の所領であったと思われる。

そして四天王寺の創建時期については以下のように考察しています。

①出土した瓦のうち創建期のものと思われる素弁八葉蓮華文軒丸瓦は法隆寺の創建伽藍（若草伽藍）と同範であり、四天王寺の創建は法隆寺（若草伽藍）と年代的に近いが、範傷があり、若草伽藍よりの時期的に遅れる。この軒丸瓦は花弁の端に朱点を表現する文様となっている。こうした瓦は、飛鳥寺→豊浦寺→法隆寺（若草伽藍）→四天王寺の順で同じ文様の瓦が使われていった。この瓦の系統は星組と呼ばれる。

②瓦の文様から、西暦の六二〇年代から六三〇年代に四天王寺の造営が始まったとするのが妥当である。日本書紀の推古元年（五九三）の創建記事「この歳始めて四天王寺を難波の荒陵に造った」という記事は作文とみる。

③四天王寺縁起には「以丁未歳始建玉造岸上（丁未の年をもって玉造の岸の上に始めて建てる）」や「癸丑歳壊移荒陵東（癸丑の年に壊し荒陵（あらはか）の東に移す）」という記事があるが、考古学的にも他の場所から四天王寺の創建当時の遺構と思われるものは発見されておらず、事実としては、四天王寺は創建当初から「荒陵地」に所在していたと考えるべきである。

さらに榊原氏は四天王寺創建説話について以下のように考察しています。

①四天王寺創建説話は聖徳太子に関する記述の一環で有り、日本書紀の編纂者が「金光明最勝王経」に記された怨敵退散の思想を参照しながら、聖徳太子を主人公にした四天王寺説話を創作した。編纂者は実在した人物であった厩戸を膨らませて、日本書紀の中で「厩戸皇子」「聖徳太子」という人物を作り上げたが、四天王寺の創建説話を作成することもその作業の一環であったと思われる。

②聖徳太子伝暦の中の物部守屋の所領の記述には四天王寺縁起の「田園」（所領）の記述が「本願の縁起」として転用されている。

＊なお、物部守屋の所領については善光寺縁起に「守屋遺領河内摂津両国田十六万八千九百四十町没官寄進天王寺」という記述があります。この記述は四天王寺縁起の記述「所領の田園十八万六千八百九十代（しろ）を没官して永き財と定め畢（おわ）んぬ。」を元にして多少数字を変えて創作されたものと考えられます。しかし、四天王寺縁起に記された「代（しろ）」という単位を「町」という五〇〇倍の単位にそのまま移し替えているため、善光寺縁起では守屋の所領がほぼ大阪府全体に拡大されています。

③四天王寺という名前が付いた時期について、日本書紀天武八年（六七九）四月条に「是日定諸寺名也」とあり、この時寺院の名を定める命令が出された。これを契機として四天王寺という寺名を正式な名称とするようになったと考えられる、それ以前は荒陵寺と呼ばれていた。新羅においても天武八年と同年の文武十九年に四天王寺という名称の寺院が誕生していた。その前身となる寺院が以前からあって、統一新羅の確立にあわせて以前からあった寺院が大幅に改め造られ、はじめて四天王寺と呼ばれるようになったことが認められる。二つの四天王寺の成立過程は近似している。

ここまでが榊原氏の考察ですが、榊原氏が引用している、物部守屋の所領についての諸氏の考察についても触れておきます。

まず棚橋利光氏の考察（「物部氏旧領と四天王寺」「大阪の歴史・２９」）では、以下にまとめられています。

①四天王寺所領の比率は河内国６８．８％、摂津国３１．２％であるが河内国の９０％以上が渋川郡（渋川郡北部）に属する。

②守屋旧領地で四天王寺領となった土地は四天王寺のすぐ東に集中している。

③物部守屋の本拠地は蘇我馬子との戦争で守屋が最後の拠点とした「渋川の第（やしき）」「阿都の別業」と言われたところを中心とした地域である。（渋川郡南部）

④物部氏の旧領は渋川郡南部を中心に渋川郡北部まで大規模に広がっていたが、その北部を中心に四天王寺に施入され、渋川郡南部を中心にした広い地域は朝廷なり蘇我氏が獲得したと思われる。その証拠として渋川郡南部には法隆寺領があり、また蘇我氏系列の渡来人（船氏、秦氏など）が分布しているが、一方物部健在の時に蟠踞していた同族の阿刀氏が河内を去って山城国、摂津国に移っている。（これは平安初期に作られた新撰姓氏録からの分析です。）

中村浩氏は、以下の考察を加えています。（「四天王寺」中村浩・南谷恵敬著）

⑤近接した古墳群（長原古墳群）が６世紀末から７世紀にかけて、水田開発の

為に上面を削平されている。先祖の墓が破壊されているという事実は、蘇我物部戦争の結果、物部氏の墓地が水田に開墾されて、四天王寺の所領となったと考えればつじつまが合う。（「四天王寺」中村浩・南谷恵敬著）

物部氏は饒速日（にぎはやひ）の子孫とされる近畿王朝内の有力豪族であり、物部総領家は麁鹿火（あらかい）・尾輿（おこし）・守屋（もりや）と継続して大連の地位を得ています。物部守屋の所領は日本書紀で誇大に描かれているとは考えられず、むしろ敗者の常として最小限の記述がなされていると考えるべきです。日本書紀に記載された、捕鳥部万（ととりべのよろず）が守っていた難波の館も渋川の地と別に実際に存在していたと思われます。

さて、これからは、榊原氏その他の考察を踏まえた上で私が考察した内容です。難波宮跡地からは前期難波宮よりも古い四天王寺同範瓦が出土しています。榊原氏は四天王寺縁起にある「以丁未歳始建玉造岸上」や「癸丑歳壊移荒陵東」の記述を意識しながらも、なぜか前期難波宮跡から出土した四天王寺同範瓦の存在を無視して、創建時から四天王寺は荒陵の地にあったと結論づけています。しかし、「玉造」の地と前期難波宮とは近接しています。前期難波宮跡から出土した四天王寺同範瓦がそこにあった寺の存在を示すものだとすると、その寺が創建時の四天王寺ということになります。この「玉造」の地こそが物部守屋の難波の館が在った土地だったのではないでしょうか。

九州年号の年代表が記載されている「二中歴」という書物には、倭京二年（六一九）に「難波天王寺聖徳造」という記事が載っています。榊原氏の推定創建時期（六二〇年代から六三〇年代）とこの「二中歴」の倭京二年とはほぼ年代的に合致します。「二中歴」の記事が前期難波宮の地に四天王寺（天王寺）が創建された史実を記したものであり、同時に「始建玉造岸上」の史実を記したものであるとすると、前期難波宮創建時にそれが荒陵東に移されたということになり、その史実を四天王寺縁起が記しているということになります。「天王寺」が荒陵東に移されたという史実は、日本書紀白雉元年（六五〇）冬十月条の「宮の土地に入れるため、丘墓を壊されまた遷された人には物を賜わったが、それぞれ差があった。」という表現になって記されたのではないかということも推測できます。この一連の流れは「物部守屋の所領地が四天王寺（初期的には前期難波宮の地にあった天王寺）の所領地として与えられた」「蘇我氏の寺であった天王寺の土地が乙巳の変の後、孝徳の前期難波宮建設地として没収され、寺は荒陵東に移されて（近畿天皇家）の寺として生まれ変わった」と考察できます。

古田史学では孝徳天皇が建造した前期難波宮は九州王朝の副都であったという説が主流になっています。その理由の一つは、「白雉」という九州年号が前期難波宮建造時に突然現れることです。しかし、（近畿天皇家）を含めた近畿勢力が九州王朝の支配下に置かれていたと考えれば、（近畿王朝）の記録にも九州年号が残っていることは当然のことです。九州年号で記録されているから九州王朝の勢力が近畿に乗り込んで前期難波宮を造ったと考えるよりも、日本書紀は九州王朝支配下での物部氏→蘇我氏→（近畿天皇家）という近畿地方内の実質的な権力移行の実態を隠蔽したと考えることの方が自然ではないかと思います。

古田史学が主張している前期難波宮九州王朝副都説について少し触れておきます。

第一に孝徳紀の「賀正の礼」についてです。孝徳紀には、大化二年、四年、五年、白雉元年、白雉三年と五回にわたり「賀正の礼」の記事が載っていますが、日本書紀において賀正の礼の記述があるのは孝徳紀だけです。私も「賀正の礼」は九州王朝の儀式であり孝徳がそれに参加したと考えます。孝徳が蘇我氏に変わる近畿の豪族代表となり、名目上の九州王朝の副都として難波宮建設を行ったとすると、九州王朝の「賀正の礼」に参加するのはある意味当然です。

第二に「味経（あじふ）の宮」についてです。古田史学の会事務局長の正木裕氏は、白雉元年の「味経の宮に行幸して賀正の礼を観た」という記事と白雉二年の「十二月晦、味経の宮に二千百余の僧尼を請じて、一切経を読ませた」という記事をもって、「味経の宮」こそが前期難波宮であり、九州王朝の副都であったと考察しています。しかし、孝徳紀全体を眺めれば「前期難波宮」の完成記事は白雉三年の「秋九月、（豊崎の）宮を造ることがまったく終わった。その宮殿の（形）状はとても論じ尽くせない」という記事であると考えます。白雉元年の「賀正の礼を観た」という記事と白雉二年の「二千百余の僧尼を請じて、一切経を読ませた」という記事は前期難波宮完成前の出来事であることから、「味経の宮」は筑紫にある九州王朝の天子の宮殿であり、孝徳が近畿から筑紫に出向いたと考えた方が良いのではないかと私は考えています。

第三に大宰府と前期難波宮の関係についてです。私は、継体が磐井の乱によって倭国（九州王朝）を乗っ取り、その後宣化の嫡男である倉之若江王（古事記の記述では嫡男ですが、日本書紀では倉稚綾媛皇女という名の皇女に換えられています）が那津官家に入って倭国（九州王朝）王を継いだという仮説を立てています。この仮説では、大伴氏（金村：大連）、物部氏（麁鹿火：大連）、蘇我氏（稲目：宣化によって初めて大臣に取り立てられた）は皆新しい九州王朝の臣下となり、欽明も近畿の一豪族にな

ったと想定しています。この仮説に従えば、近畿の歴代最有力者が九州王朝の「賀正の礼」に参加していたと想定することには無理がありません。孝徳は乙巳の変によって蘇我氏から近畿最有力者の地位を奪い九州王朝の「賀正の礼」に初めて参加すると共に、大宰府に倣って難波に副都を建設しようと考えたのではないでしょうか。物部から蘇我、蘇我から（近畿天皇家）へと移る権力の移動は近畿の豪族内のものであり、そこに九州王朝の関与は認められません。孝徳が造営した前期難波宮は名目上倭国の副都であったと思われますが、一方で近畿勢力はすでに実質的な日本の全体支配を進めていたと考えられます。大宰府と前期難波宮との関係は、後世における京都と幕府の置かれた鎌倉や江戸との関係に似たものだったのではないでしょうか。

道をゆく　（9）

成瀬和之

「伊勢本街道」（三）
旅のはじまりの後半と最初の峠

二〇一九年四月三日（水）
二四名の参加。

札ノ辻をさらに直進し、宇陀川につき当たったところで、川向うに墨坂神社が見えます。いよいよ伊勢本街道の本番です。橋を渡り、ここから川を左手に見ながら川沿いに国道三六九号を行くと、桧牧市場から数百メートルのところに御井神社があります。松並木の間の石灯篭と立派な鳥居は眼をみはるものがあります。この御井神社の境内には、ツルマンリョウの群落があり県の天然記念物に指定されています。

さらに国道に沿って歩くと高井に出ます。高井から山道へ入る道に仏隆寺や室生への道を示す三基の石碑が立っています。ここからは国道とも離れ、ゆるやかにアップダウンを繰り返しながら本街道は山麓の山道を行きます。旧旅籠の家々や関所跡などが往時をしのばせ、道端の道標や案内板をたよりに、いにしえの旅人気分を満喫できます。

坂道を登り詰めると、松本家・休憩所です。松本家は旧庄屋で旅籠でもありました。横に休憩所があり、お茶を飲んだり衣服や靴を整えたり、一息つきました。

松本家を過ぎると全くの山道です。杉木立の中を進むと、一本の根元に幹が数十本もあるかと思われる千本杉が現れました。杉の下に井戸があるためにこのように巨大な木になったようです。この井戸から高井の地名がついたと言われます。

千本杉を上り詰めると赤埴（あかばね）甲地区です。ここが赤埴宿の中心であった「津越辻」で、左手には三〇〇年も経ているというわら葺屋根の立派な津越家が立っています。たまたま家の所有者の女性が家の前に居られ、大勢で歩いている我々に気付かれ、家の中を案内してくださいました。

小高くなった赤埴の津越の辻からは榛原の山々が見え、のどかな田園風景です。右手に集会所があり三叉路には「右いせ道」の道標があり、案内板が設置されています。ここで昼食休憩です。田園風景を眺め談笑しながら、おにぎりをほおばりました。

赤埴甲公民館前に万葉歌碑が立っていました。

倭の　宇陀の真赤土の　さ丹着かば
そこもか人の　吾を言なさむ

万葉集巻七―一三七六　作者不詳）
（歌の意味）
大和の宇陀の真赤土の赤い色が着物についたならば、そのことで人たちが、あれこれと私の噂を立てるだろうか。
いにしえ人も恋の噂が気になったのですね。

いよいよ伊勢本街道の最高地点である石割峠（六九五m）に向かいますが、私は病みあがりのため、ここで、千本杉横の坂道を下りて、「ふるさと館」へ向かいました。ここでバスのお迎えを待ちます。成り行きで峠まで行くことにした人々は、まだ寒く残雪も残っており、大変苦労されたとの事。私は自重して良かったです。夜の菅谷先生の講演及び懇親会も、自重して今回はパスさせていただきました。

「令和」にちなむ万葉集のトピックな話題を提供されたということです。

孫ウォッチング（31）

福田　圭

一二月一四日（土）一五日（日）息子家族が四人で大阪にやってきました。

新大阪駅に迎えに行くと、お兄ちゃんの光君（四歳。ペンネーム）が通りに座り込んで「おんぶ」と言って動きません。お父さんが無理やり歩かせようとすると、こけて頭を打って大泣きです。「前途多難」を思わせる里帰りの始まりです。

お父さんとお母さんは知人宅へお出かけをし、おじいちゃんとおばあちゃんとで二人の孫の面倒を見ることになりました。前回の「山登り」の延長で、淀川堤防に散歩に連れ出しました。

河川敷の公園に「平均台」のような遊具があり、二人の孫が順番にその上を歩きます。両方から手をつないでいる、おじいちゃんとおばあちゃんは落ちやしないかとハラハラドキドキです。そると、

お兄ちゃんの光君は、わざと、躓く「まね」をして、おじいちゃん・おばあちゃんの反応を楽しんでいます。それを三回も繰り返します。疲れてきたおじいちゃんは、弟の葵君（二歳。ペンネーム）に「二回でやめとこうね」と提案すると、「もう一回」とアピールをします。弟も「平等」にしてほしいと主張しているのです。

家に連れて帰ると、今度はソファーの上で飛んだり跳ねたりです。葵君はソファーの背もたれの上に立って、下へ降りようとします。また前回のように頭から落ちないかと、またハラハラドキドキです。ついには光君が組み立て式のソファベッドの「分解」を始めました。おじいちゃんはギブアップです。二人の男の子の孫とは「とても一緒に住めない」と、つくづくため息が出ます。

昔「テレビに子守をさせないで」と教育書などに書かれていたのを思い出します。今なら「スマホに子守をさせないで」となるのでしょう。そんなことは言っていられません。テレビに録画してある番組一覧からアニメ番組を探します。年寄夫婦の録画番組の中にアニメなどあろう筈がありません。「あった。」「アナと雪の女王」がアニメ番組でたった一つ残っていたのです。上映を始めると光君は夢中になって見始めました。コマーシャルが入ると、「もっと見たい」とブーイングです。葵君の方は内容がわからないのもあって、散歩の疲れでソファーの上でスヤスヤ気持ちよさそうに寝てくれました。ひとときの老夫婦に「やすらぎの刻」がおとずれました。

番組が終わると夕食です。ご飯を食べている間は比較的「平穏」でしたが、夕食が終わると、また二人のドタバタが始まりました。クリスマスツリーが飾ってあったのですが、ひも状の飾りを引っ張って、クリスマスツリーをひっくり返してしまいました。「出かけているお父さん・お母さんをケータイで呼び返そうか」とおばあちゃんまで言い出す始末です。

その時、ようやく、お父さんとお母さんが返ってきました。

一五日になり、朝ごはんの時です。弟の葵君は自分でご飯を食べているのに、光君はご飯を食べようとしません。また、弟に「しっと」して「かまってほしい」ということかなと思っていると、光君はウンチをしていたのです。この頃の紙おむつは快適なのかおむつが取れるのが遅かったのですが、ようやく保育園ではトイレに行けるようになっていました。しかし、旅先の不慣れか、緊張のためか光君はウンチをしてしまいました。朝食のテーブルに座るのが気持ち悪かったのでしょう。お父さんが発見しておむつを替えたのですが、その時、床にはみ出したウンチが落ちていたようです。それを葵君が靴下で踏みつけて、また大騒ぎです。

古希を迎えようとするおじいちゃんは、孫が来るのは可愛いが、孫が帰ったら「ホッとする」というのも正直なところです。孫は「来てうれし、帰ってうれし」ということでしょうか。

それでも、二日目にもなると、光君は淀川堤防の例の「平均台」に一人でよじ登れるようになり、葵君もソファーの背もたれの上に登り、足から床に降りることができるようになっています。衰えゆくおじいちゃんを乗り越えて、孫たちは一つ一つ「学習」を積み重ね、しっかりと「成長」していきます

〈メモ欄〉

編集後記

新年あけましておめでとうございます。

今年もよろしくお願いいたします。

正月2日には、恒例の愛宕山へ麻田さん、伊藤さんと私で登ってきました。快晴で温かく最高でした。いつものようにお神酒を幾杯も頂きました。

今年も頑張りますので、ご協力をお願いします。

連載 ふみの道草（１９）　山椒魚

石はなにからできている？
ケンケンパ昭和の顔が消えた町―

昭和も遠くなった。路地で石けりをする子どもの姿を見ることもなくなった。絵本『石はなにからでいる？』を見てそんな思いがした。

この本を読み進みながら、子どものころに何気なく蹴った石、川原で見つけた丸いきれいな石、川面に投げて石飛ばしをして遊んだ平べったい石、あの石ころは何だったのかなどと思った。歳を取ってからでも、こんな本に出合うとうれしい。

この絵本は、「子どもたちに伝えたい、面白いこと、不思議なことをわかりやすく解説した新しいタイプの知識絵本シリーズ」として岩崎書店刊行の「ちしきのぽけっと」シリーズ第二十三巻である（西村寿雄・文、武田晋一・写真、ボコヤマクリタ・構成、二〇一八年）。石の写真は鮮明で思わず見入ってしまうほど美しい。

絵本を開くと、表の見返しに闇に浮かぶ月の写真がある。続いて、「月は、水のない世界。月は、灰色の世界」の文章と写真とが並ぶ。そして、月の石の写真の横に、「月の石は灰色のものばかり」とある。おやっ？と思わせる導入である。

次に、「石はなにからできている？」と本文が始まる。「川原や海岸でひろった石。山からはこばれてきたいろいろな石。地球の石は、いろとりどり」と続き、身近な石の写真と説明がある。しかし、「石ころは〈地球の花〉」という結びの章に入るまで、石の名まえは一切、出てこない。石への興味を持続させる、巧みな構成である。

説明は具体的である。つぶつぶが見える石と見えない石。①キラキラしたつぶつぶが見える白っぽい石・灰色っぽい石・黒っぽい石―これらはマグマからできた石である。②つぶつぶはあるがキラキラしない石―小さな石が集まったでこぼこの石・砂の粒が積み重なったざらざらした石。③そもそも、つぶつぶが見えない石―泥が固まった石・生き物からできた白っぽい石・生物からできたかたい石でいろいろな色と模様を持った石。川原でよく目にする8種類の石が、その拡大写真と共に示され説明されていく。

「石ころは〈地球の花〉」という結びの章では、それまでに取り上げてきた石の名まえが初めて登場し、その見分け方が分かりやすく述べられている。

①キラキラしたつぶが見える石
→マグマから生まれた石
・花崗岩（白っぽい）
・安山岩（灰色っぽい）
・玄武岩（黒っぽい）

②キラキラしたつぶが見えない石
→水の流れによって生まれた石
・礫岩（つぶが大きい）
・砂岩（つぶは小さい）
・③泥岩（つぶは見えなく、つるつるした手ざわり。われやすい）

→③生物の殻（死骸）がもとで生まれた石
・石灰岩（つるつるして、傷がつきやすい。酸性のトイレ洗剤をかけると泡が出る）
・チャート（とてもかたい。火打ち石に使われていた）

石が生まれるには水が重要な働きをする。石は水の惑星・地球に生まれた花である、とこの本は言う。たとえば、マグマからできた花崗岩や安山岩は月や他の惑星にはない。生まれて間もない地球は熱いマグマでおおわれていたが、やがて冷えて黒っぽい玄武岩でおおわれた。その後、地球には雨が降り、海ができた。やがて動き出した岩板（プレート）が海水と共に地下深くもぐりこみ、水の働きで花崗岩や安山岩が生まれたのである。水のない月には、マグマからできた石は玄武岩しかない。礫岩・砂岩・泥岩も、生物由来の石も地球が水の星であればこそ生まれた。石は宇宙からの贈り物・地球に咲いた花であることに興味をかき立ててくれる本である。

俳句

土田　裕

反物のごとき初刷届きけり
何ごともなきを言祝ぎ初日記
行きずりの社で済ます初詣
外つ国のコインも混じる初詣
初富士を拝す湖より海辺より

影山　武司

杉玉の梁の軋みや霜の声
電車待つ膝にはケーキ冬満月
星々の声に聞き入る聖夜かな
小半日父母と語らひ年用意
掛け違ふ釦を正す除夜の鐘
元朝の光清けしペダル漕ぐ
年の酒下戸の父よりすすめられ
蹴り上ぐるボールの行方初御空
読初の函より出しぬ巻の一
初風呂やきつぱり落とす無精髭